
バカとテストと召喚獣～coldlove『馬鹿な君が好き』～

OOO・JANIKELU

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと召喚獣～cold love『馬鹿な君が好き～

【Zコード】

Z8501X

【作者名】

OOO・JANIKELU

【あらすじ】

その日…恋愛感情が消えた…

打倒Aクラス！僕らの力見せてやる！

吉井明久とオリキヤラ達がくり広げる学園ラブコメディ！

汚れてしまった心は簡単には流せない。.

プロローグ（前書き）

皆様初めまして！クロスオーバーを書いている途中ふとアイデアが浮かび気づいてたら投稿していました

更新は遅めですが良かつたら是非読んでください！

プロローグ

『「めんなれ。あなたと付き合ひの訳にはないの…』

その言葉を心臓をえぐり取られるよつつかつたのかもしれない

『だつて…あなたと一緒にいたら私まで酷いから…』

恋愛とはなんてはかないものだらうか…

残酷すぎる仕打ち…周りからの罵…

なんでこんな感情を持つたのだろうか？

…好きなのはいけないことだらうか？

誰か教えてくれ…

告白した彼女は哀れむように見ながら去る

『『めんー待つた？』

『大丈夫だ。お前も苦労してるな』

『「うん…あんな奴どもいいよ。私はあなたがいいから』

『わかつてゐるじゃないか』

『なんでだろ？…彼女に利用されたのだろうか？』

財布は軽く…ほとんど彼女の為に使つた

そしてお人好しにも程があることを今日理解した

「.....」

その日……重い足を引きずりながら

夜の道を孤独に歩いたのだった

一問目・僕と起床と一度目の春

「ひらかな朝…優しい光が部屋を照らす 温かい光が静かに眠っている少年に降りそそぐ

「ん……朝?」

茶髪にまるでネジが一本抜けたような雰囲気を持った少年…吉井明久は目をこすりながら窓を見た

「今日も良い天氣だ…」

明久 side

ぐっと伸びをしつつ時計をチラリと見やる
目覚めにはちょうど良い時間だ…軽く欠伸をしながらベッドから降りた

「さて…今日も頑張らなくちゃね…」

「一度目の春を迎える僕は私立文月学園の一年生になった
クラスは最下位のFクラスだけどなかなか楽しい生活は送っている
つもりだ

「それにしても…今日は珍しく早起きできたな…」

「いつも目覚めが悪い…わけじゃないけど…

うん…いつもは8時前に起きてるからギリギリ大丈夫！

「弁当作らないとね…」

「今日はみんなの分を作るって言ってたからなあ…約束は約束だし

自室から出て冷蔵庫を開ける

「何作る？…久しぶりにパエリアでも作ってみよつかな？弁当に
パエリアはちょっとおかしいけどまあ大丈夫だよね～」

材料を冷蔵庫から取り出しHプロンを着ける

「 もう準備完了… まずはパプリカを…」

初日一回戦…まあEクラスに買った後Aクラスに敗北し…格下げダンボール…いきなり辛い状況になってしまった

負けた原因是雄一だ。

いや僕にも…いやいや雄一のせいだ！なんだよ53つて？
小学校レベルの問題で53は正直ありえない…
あんなの余裕だよ…それ以外は無理だけど

「 はあ…もつ姫路さん達もEクラスに染まつてしまひし…なんとか
しなきゃ」

別に僕にせびりでもいいけどそのままじゃ女子がいなくなるからね

あくまでもクラスの為だ。僕にとっては本当にいいでもない

「よし…できた！」

うーん…いい匂いだ…流石は僕ー弁当箱に詰めた後は朝食用も用意
しなきゃ

しばらくいろいろと準備をした後、玄関を降りる

誰も居ない静かな静かな部屋…

「行つてきまーす」

僕はボソリと呟き静かに部屋から出て行つた

まだ満開に咲きほこる桜…

けどそれには色がない…何故だろ？…

まるで僕が見えていないかのように周りにいる人達は綺麗な桃色だと和んでいた

「…まあ…」

桜から田を離し再び歩き始める…こんなにいい天気なのに静かだ…周りは騒がしいけど…なんといつか…うーんわからないや

「……まあ…」

居るよ…女子達が…こんな朝早くから…面倒だなあ
女子達はきやつきやつと桜を見て騒いでいる…全く精神年齢が低いな

とつあえず下を向いてその場なんとか通つた…ふう危づく絡まれるところだった

じつときの様子眺めた後、鞄を持ち直し文翔学園へと走つて
行つた

一 開目・変更と紹介と運命の出会い

古びた教室…相変わらず酷い設備だ…」は…

ゆっくりと扉を開けて教室へと入った

「おはよう」

苦笑しながらみんなに挨拶する。これは僕らの口課だ

「おはよつのじや 明久」

まず必ず最初に挨拶してくれるのは一件女に見えるけど美少年の木下秀吉。僕の大好きな親友だ

「…………（「ク」「ク）」

この無口な奴は土屋康太ことマッシュリー…まあマッシュリスケべつて意味なんだけど

「おう…早いな明久」

そしてこいつは悪友の坂本雄一…僕はこいつを地獄へ叩き落とすことを考えている

だつて僕と雄一はそんな関係だからね

「おはようアキー今日は珍しいわね」

このちよつと僕を馬鹿にしたように言っているのは島田美波
今日もポーテールが似合っている

「おはよう」やります明久君。 今日も頑張りましょう

この人は姫路瑞希…学年で三位以内に入る優等生なんだけど振り分け試験で体調を崩し退席して今はFクラスだ
相変わらず可愛い顔だ

「二人共おはよう。 今日はなんだか胸騒ぎがしちゃって」

そう言つた後、席とは言えないダンボールの前に座つた
うん… やっぱりダンボールだから違和感が

「...」

みんながワイワイと騒いでいる中、僕は一番隅に座った
なんか落ち着くんだよね…
そこに姫路さんと美波が歩いてくる
なんだろ?

「あ、明久君昨日は楽しかったですかね」

昨日…ああ。そう言えば映画に連れて行かれたんだよね
なじみの霧島さんと楽しく?見ていたし 雄一は幼

幼なじみか…僕にはいないなあ…セイジくんは雄一が羨ましく思えてしまうかな

「明久君? どうしたんですか?」

おっといかんいかん…つい考えに夢中になつてたよ

「いやあ… そうだね。一人が満足してくれて良かつたよ… あはは」

軽く手を振る… はあ… 何でこんなに疲れてるんだろう
ただ… 一人と映画に行つただけなのに

なんて考えてたらガラリと扉が開いた

「キーンゴーンカーンゴーン。お前ら早く席に着け」

「あれ? 鉄… 西村先生なんで教室に?」

おかしな… 担任は福原先生のはずなんだけど… 何でこんな暑苦しくて筋肉質な鉄人が

「ああ… そのことなんだがな見せてもらつたぞお前の戦争」

あれ？ 鉄人のボルテージがなんか上がつていってない？

「まさか馬鹿なお前らがここまでやるとは思わなかつた…だが結果的にはAクラスにお前らは負けた」

「どんどん鉄人のメーターが上がり…駄目だスカウターなんか役にたたない！」

「そこで福原先生に変わつて生徒指導担当の俺がこここの担任になつた！ 喜べお前ら。みっちり指導してやるー！」

「「な、何イイイイイイ」」

「鉄人が…担任！？」

僕らの学園ライフは早くも地獄化しそうです…くそ…ビリにか奴から逃げる手だてを…

「そして今日は転入生が入つてくれるぞ」

「「何イイイイイイー！？」」

うわ…むさいしうるさい

なんでこんなにテンションが上がるかなあ…

「先生！転入生は女ですか！？」

「はあ…なんで貴様らはそういうことにほくいつてくるんだ…」

鉄人は溜め息をつく…そりゃそうだ。僕だって疲れるよ

「喜べ…四人のうち三人は女だ」

『『『イツーヤツフウウウー!』』』

ああ…三人も来るのか。別にどうでもいいや勉強でもしてお
科目はやっぱり日本史かな

「静かにしろお前ら。よし転入生入つてこい」

ガラツと扉が開き四人の転入生が入ってきた
ふーん…やっぱり可愛いね

みんなは鉄人に黙らされてしまひでいた

「せきはらようつや関原陽哉だ。趣味はゲームやスポーツ…それから…」

黒い髪でショートに吊り田の関原君は何か考えていたけどすぐに口を開いた

「まあよひしへー。」

ないのかよ…まあどうに思いつくのは難しいけど

関原君は苦い笑いをしながら後ろに下がり、入れ替わるように黒くて長い髪の子が前に出た
瞳は緑だ…

「初めまして…月夜光奈つてています。優しい人が好みです」

そう言ってにっこり笑うとみんなニヤケていた… その様子に月夜さんは若干引いてたけど

「新野友里恵です！陽哉君とは幼なじみで…」

そこで少しためる新野さん

『『幼なじみで
……？』』

クラスのみんなは武器を持って構えている… わよつみんな何やってるのさ

「恋人です」

「おい！ 友里恵何決めて… うわあ！」

関原君の足元に大量のカツターナイフが…関原君…初日早々大変だね

新野さんは首を傾げながら後ろに下がった

新野さんは綺麗なクリアブルーの瞳に銀髪のようで少し青みがかか
つた綺麗な髪が特徴だ

なるほど… 関原君と新野さんは幼なじみ… 新野さんは関原君が好き
で勝手に恋人関係にしてると… 勝手だなあ

「静かにしろお前ら。次で最後だな」

鉄人は呆れたように溜め息をついていた

鉄人の声に反応してすっと最後の一人が出てきた

『『おお…』』

最後の一人は茶髪にボニー・テール…そして綺麗なクリアレッドな瞳
に大きくも小さくもない胸…
スタイル抜群の体をしている

「赤咲鈴です！好きなことは掃除とお料理です！」

(へえ… 最近の子にしては趣味が立派だなあ…)

赤咲さんは桜の形をした髪飾りをつけている

「よし。四人は空いた席へ自由に座ってくれ。今日もしっかり勉学に励むよ！」

鉄人がそう言って出て行った後、まあどうなるかはわかったことだけど

『諸君ここは何処だ！』

ほーら始まつたよ……僕関係ないのに何故か捕まるんだよね
今日はバレてないから助かつた…

『では異端審問を始める！…』

「ちよつ！何だ？」

関原君を遠い目で見ながら教科書へと視線を戻した

天気は晴れ……日差しがあたつて影ができやすい

だから誰かが「」に来た」とはすぐにわかる

「あの……君が吉井君だよね？」

「ああ……君は確か円夜さんだよね？」

「うやうやしきの転入生達みたいだ。何の用かな……美波達みたいに馬鹿にしこきたのかな？」

「うふ！ 初めまして吉井君！」

そう言って円夜さんは前の席に座った
少し苦い顔になりながら僕はちょっとだけわからぬように離れた

「やつぼーー私は新野友里恵ーーよろしくねアッキーーー！」

「うふ……よろしく……アッキー？」

新野さんは「『」と笑いながら月夜さんの隣に座った

「うん！だつて吉井明久だからアッキー！」

なんだそりゃ……まあいや美波にアキッて言われてるし

「あはは……よろしく月夜さん。新野さん」

なんだ……みんな僕を馬鹿にきたわけじゃないのか……そうだよね姫路さんみたいに優しい人なんていくらでもいるし……僕のことこの人達はまだ詳しく知らないしね

「私赤咲鈴！よろしくね！」

赤咲さんはそう言って手を出していく
ああ握手か…

「よろしく……赤咲さん」

優しく握り互いに握手をする

赤咲さんは微笑んだ後隣に座つた

あつといつ間に女子に囲まれてしまつた… やばい美波達からの関節
技は覚悟しなければ…あつ… 異端審問にはかけられないよね？

「…………？」

後ろから鋭い視線が突き刺さつた… ブリキのようにギチギチと振り
返つてみると修羅が一人降臨していた
やつぱり来た… なんでいつもこいつなるのを

「全くアキたら… ウチらよりも早く転入生と仲良くなるんだから」

「なんのことだよ美波… 別に僕は」

やばい足が震えて力が入らない
これだから女子は嫌なんだ！

「そつですー明久君には何から今まで吐いてもらいますからねー」

姫路さんー君はなんて恐ろしいことを考えるんだーくそ… 雄一は

「おひつ…俺は坂本雄一だ」

「ワシは木下秀吉…言つておくが男じや」

「…………土屋康太」

くつそ！転入生とのんびり話やがつて！僕は危機的状況なのにいい！姫路さんと美波はどこから取り出したかわからない金属バットを持つていた

「そんな物で叩かれたら確実にザクロのように何かが飛び出るんだけど！？」

「大丈夫よ。綺麗に終わらせてあげるから」

「はい…綺麗にです」

は…ははーあはははー今日で命日か

僕は振り下ろされるバットをただ眺めていた

二問田・早弁と笑顔と突然の誘い

だから嫌なんだよ女子は…なんで僕がこんな田にならなきゃいけないのさ

「痛…」

まだ頭がズキズキと響く包帯越しからでも感じ取れる…はあ…なんか不幸だ

「随分派手にやられたな明久」

雄一は僕の作ったパエリアをもつ食べている。いわゆる早弁だ。パエリアを口に運びながら僕は苦笑してみせた

「担任が鉄人か…最悪だよ」

くそ…あの時負けなかつたら今頃はこんなことにならなかつたのに

ん?試験召喚戦争?

「そうだ！もう一度Aクラスに召喚戦争を挑めば」

「……それは無理」

ムツツリーはパクつきながら喋った

「ええ…？なんですかー？」

「召喚戦争に負けると3ヶ月は行うことができるなくなっている」

雄一は軽い顔をしながらちらりと言つた

「さ、3ヶ用!?

ずしりと3ヶ月がのしかかつた。ぐ：3ヶ月かきついなあ

「… もぐ。 なあに3ヶ月なんてあつと書つ間だ。 その間に次の策を考えるや」

「これはムカつくけど言つていい」とは正しいし作戦に関して元神童だけあつてかなり戦略的だ

「んぐ。そうだよね……」

パエリアを口に運びボソリと呟いた
雄一は気にしないかのように口を開く

「んで明久。転校生達とはどうだ?」

「どうだつて…別に」

「そりゃ…お前の近くに座つてるから戦力とか知つてるんじゃない
かと思つたんだがな」

「無理無理…僕は女子は苦手だから」

ブンブンと手を振ると雄一は溜め息をつきながら納得した。あまり
女子のことは信用できない

「む。明久お主何か忘れておらぬか?」

「え…？ 「明久君」ここに居たんですねー！」

振り返つて見ると二コ二コと笑いながらこっちへ歩いてくる美波と姫路さんが居た

「どうしたの二人共？」

「どうしたもうこうしたも「待たせたな吉井達…！」」

美波の言葉を遮るかのように関原君が屋上に上がってきた。関原君は両手に飲み物の缶を持っている

「ありがとう関原君。ごめんね？転入して來たばかりなのに」

「いいや大丈夫だ。校内の中も知つておきたかったしな」

僕らは笑いあつて弁当がある場所まで歩いた。あれ？何か忘れてる
ような気が

「後で来るわ」

あれ？ 美波達なんで帰ったのかな？

「まあ仕方ないのじゃ」

秀吉は溜め息をつきながらパエリアを口に運んだ。ん？ 何だろ

「関原君も食べて食べて」

「ねつ… 悪いな… それじゃお皿葉に付けてー。」

しばらく弁当を食べていたらまた誰かが屋上へと上がってきたようだ

「あつ… 陽哉君ー！」こじたのねー。」

「ふほー… げつ… 友里恵」

関原君は盛大に吹き大惨事になってしまった。ちょっと…大丈夫関原君！

「何よげって…酷いなー」

ぶすうとふてくされる新野さんを無視するかのよつて関原君はまたパエリアを口に含んだ

「つめえ…ー」

「陽哉君の馬鹿ー！」

「ぐふああ！」

綺麗な飛び蹴りが炸裂して関原君は吹き飛ばされた。おお…綺麗な曲線を描いてる

「全く…」

「あつ…」めんね！いつもあんな感じなの

「こつもひで……」

まるで霧島さんと雄一みたいだ。いや……あれは雄一が悪いから

「お主らも大変じゃの……」

「うん……でも慣れてるから」

赤咲さんは苦笑しながら視線をパエリアへと移した。赤咲さんの目
がキラキラと光っていた

「凄い……パエリアだ！誰が作ったんですか！？」

「僕だけど……」

おずおずと手を挙げると尊敬の眼差しが突き刺さった。う……

「凄い！パエリアが作れるなんて……憧れるなあ

「…はは。ちょっと照れるな」

女の子から褒められるなんて人生で今日が初めてだ

「凄いなあ…食べてみてもいいかな？」

「うふ…味は保証できないけど」

赤咲さんはスッと口に入れた。女子にはきついかな？

「美味しい…美味しいよ吉井君！」

凄く幸せそうな顔をしながらこっちの方を振り返ったので目を逸らしながら手を横に振りながら笑った

「私もアツキーが作つたパエリア食べるわ！」

「私も！」

「みんな僕のことば明久でいいよ

別に吉井君でもここんだけまあいつかの方が呼びやすいいし

「じゃあ俺の」と咲耶哉つて呼んでくれー！」

「うん。よししく陽哉…じゃあ僕はちょっと用があるから。みんな
は食べてる

急ぐよしつて廊上から降つていった。あまり関わりなこみつしなく
やけ

崩れる前に

「はあ……疲れたなあ……」

教室に帰つて教科書を開きながら一つ溜め息

「……あんな喜んでくれた顔…初めて見た」

美味しい」と言つてどんどん食べててくれた赤咲さん達…言葉には嘘がないくらい純粋さがあつた

「僕は何に怯えてるのかな…」

じつと自分の手の平を眺めながら軽く苦笑した。考えてもわからな
いことを考へるなんて今日はどうかしてるよほんと…

「溜め息ばっかりついてても埒があかない。勉強を少しでもやるつ

ござ再開しようとした時、わたくしのように教科書に影が差した

誰だらうと振り返つてみたら案の定あの一人だ

「アキ……ちよつとい？」

「何一人共？相談？」

「違つわよ。約束覚えてるわよね？」

約束？…までまで。こゝで忘れましたと言つたら確實に包帯を巻いてる頭が完全に割れる
よし…こゝは

「ああ…プロレスを観に行くんだったよね？」

「どうしたらそんな答えができるんですか？」

呆れられた！？結構真面目に答えたんだけど…『まー一人と言つたら
関節技でしょ？』

「全く…今週の日曜日クレープを奢ってくれるついで約束でしょ」

「はい…？あれは昨日で終わつたんじやなかつたのか…」

美波：そんなことしたら僕の食費は吹き飛ぶよ。只でさえ苦労して
るのに

「昨日は昨日。約束は約束よ」

その言葉にうなだれていると姫路さんがおずおずと口を開いた

「あの私もいいですか？」

「え…姫路さんも…？」

「はい…観たい映画があるんです」

亀裂が入り僕の心は一つに裂けてしまった。

人物紹介（主人公）

吉井 明久
よしいあきひさ

身長176 / 体重56

クラス：Fクラス

性格：冷静かつ真面目／普段は冷たいが本当は優しく馬鹿

趣味：ゲーム、料理、家事、日本史や経済の勉強

好きなもの：ゲームやエロ本、トランプなどなど

嫌いなもの：騙す女や不良、など

原作と違ひだいぶ変化しています。

- 原作とこの小説の主人公。過去の出来事から女子と仲良くするのを極端に避けている。また雄二達信じてはいるがあまり本性を出さない

- そんな冷たい性格だが仲間を大事にしつつ困っている人を助ける優しい性格はちゃんと残っている
- 同性愛者を好まず、恋愛には敏感な方である

周りからは馬鹿や変態、観察処分者の糞野郎と罵倒されているが本人は気にしていない。試験戦争の時や試験を解く時はダテ眼鏡を着ける

- ・得意科目 苦手は勉強してきたことで特になく日本史や世界史がしば抜けているが、他は平常点しかしテストでは常に満点を取るが試験戦争の時は何故か低い点を取っている

外見の変化 少し吊り目になつていているが表情は表ではやんわりしている

「だぜ」や「だな」などたまに言葉が雄一のよみこなる

明久の召喚獣の変化について

制服が赤くなり少し豪華になつてこる
(神のみぞ知るセカイの制服風)

武器は木刀から銃に変わっている。しかしメイン武器は刀

腕輪を持つていて『凍結』と『ハンドレットパワー』の一いつを使用する

しかし使用するたびに操縦者に負荷がかかり体力をかなり消費する

その他

得意料理はパエリアとリゾット

好きな人はおらず常に離れている

暴力を振る奴らは嫌いでFFF団は常に無視している。秀吉を男として見ていて、工口本には興味を示す心を閉ざしていて雄一達と対立しやすい

陽哉^{オリキャラ}には興味を示し親友である

同性愛者の久保は大嫌いで容赦ないが、玉野には意外と普通に接しているが女装のことになると容赦ない

四問目・食費とパートとスタンガン

「何を好んで女の子に奢らなきやならないんだ」

口を尖らせながら、今はキッチンにいる。何をするのかは凄く簡単で朝食だ…といつより朝食になるのかこれ

目の前にはカップ麺…そして包丁がある
えつと真つ二つに切つて…これは夕食用として

「はあ…バイトやらないといけないかな…」

今日は恐らく出費が厳しい…特に一人となれば…軽く諭吉が飛びそうだ。はあ…本当に朝から不幸だ

噴水広場集合か…いかにもカツプルらしいね。まああの二人だからそういうシチュエーションは期待されないししたくないかな。別に二人が嫌いということではなくてただ変な勘違いはされたくないだけ。特に雄一達には

「うーケチりたいのは山々なんだけど…流石に駄目だよな」

「ハーハー」とは男がやらないといけないから

少しばかし歩いてると姫路さんが既に待っていた。流石は姫路さんだ。やっぱり賢いや…腐女子なのは気にせず

「おはよう姫路さん」

「おはようございます明久君。今日も良いお天気ですね」

「一コラ」と笑う姫路さんに苦笑ながら周りを見る。くそ…やつぱりカツプルが多いな

「何ボーとしてるのよアキー。」

「…ん？」

振り返つてみると美波が一コロコと笑っていた

「君には食費を失う気持ちがわからないだろ? うね」

「何のこじよ?」

美波はそのまま姫路さんの方へ歩いて行き楽しそうに会話していた。

「おはよっ瑞希ー。その服可愛いわねー。」

「おはよー! やれこます美波ちゃん。でもこの服を選んでいて時間が掛かっちゃいました」

「ウチもよ。ふつ、去年着ていたのがまだ着れてラッキー！」

「くえ…それは胸が発達しな『忘れなさい』今の言葉を撤回しなさい…」「わざわざああ…」

関節があー右足関節がメキメキと砕け…つ、ああー痛えええ！

「……見えてるー。」

「む、ムツツコーーー何やつてゐの…」

ムツツコーーはキリッとした顔でいつこい放つた

「血主アーッ」

どんな血主アーッだよ…

s.i.d.e 陽哉

朝…なんて残虐なんだ

「起一きて陽哉くーん」

それは天使のよつなれをやめ声こぼれ遠い… 悪魔のわかれを

「……………」

素早く横へ抜け出しがと着地… ふつ相変わらず危ない格好して
いるわざやきの張本人を見る

「相変わらずだな… お前は」

下着だけって…いやマジで危ない… すげえ危ない

普通なら理性が吹き飛ぶくらいにこいつはいっつぱりプロポーションなんだ。
俺は毎日こじつだから慣れてこる

頬は若干赤いがな…

「だつて…陽哉君が襲ってくれないんだもーん」

「ば 馬鹿言つなーなんでお前を襲わなきゃならないんだよー」

普通なら『なかなか起きてくれない』だろー? こいつは思考回路が
おかしいのか!?

「え…?別に私はいつでも準備OKだよ?」

だ、駄目だ。こいつ恥じらってもんはないのか!?

「あの人あ…俺はお前と添い寝しないし…だいいち彼氏でもない

「またまた~本当は胸を早く揉みたいんだよね?」

「爆弾発言もほんの少し...なー?近ー?近ー?」

「ここ二つの間にか皿の間に...またひらひら!」

「陽哉君... 私じゃ駄目なの?」

「え...?べ、別にやつぱりいる感じじゃなくてね」

「ぐへ... 淀田と上田使いは反則だろ... 正直可憐いんだが...」

「やつた ー...じやあ早速ー」

「ばー...ズボンずなあああー...童貞をやるつもつはないんだよー...」

「またまた~」

「いい加減にしろ！」

俺の平和的な朝は一〇月十四日が最後だ

久明 時

「おこねこ…… じれはせばこ……」

ちょっと待ってくれ… 今日に限つてなんでこんなに高いのさ…！ス
ター来日？知らないよ！僕を殺す気…？

「今日はアキが選んでいいわよ」

「：本当？」

そりゃあ先週は一人が選んで恋愛者を観たんだっけ？別に嫌いで
はないけどカップルが多くて…ちょっと耐えられなかつたな。うー
んＳＦとかいいよなあ…あ。でも一人には荷が重いよな

「…諦める明久」

しばし唸つているとあいつ…雄一が手錠を付けて霧島さんと一緒に
現れた

「男とは無力だ…」

苦しそうに呟く雄一。わかるよ雄一…だけど霧島さんと付き合いつつ
ていう約束だから僕は止めることはできない。といつも雄一。それ
昨日の台詞だよ

「…雄一…どれが観たい？」

「俺の望みは…叶えられるのか？」

確かにそうだ…僕だつて早く自由になつたいたさ。今頃…家でゲームする予定だつたのに

霧島さんは無視するかのようにポスターを見た。ん?なんかヤバそうだ

「……じゃあ『愛を僕は叫びたい』」

「ちよつと待て! 8時間20分もあるぞ!」

「一回観る」

「16時間40分も座つてられるか!」

待て雄一! これは昨日と同じ…

「退屈なら寝ていい」

「待て翔子…あべあおぐつあーーー!」

スタンガンで一瞬で眠りについた雄一を哀れんだ目で僕は見ながら手を合わせた

霧島さん…君は末怖いよ

「はつきり意志が伝えられる人って羨ましいです！」

「憧れちゃうよね～」

君達…お前達はあれのどこがいいんだ…

四題目・食費ヒートスタンガン？（前書き）

吉井明久のみんなに質問コーナー！

明久『よい子のみんな吉井明久の質問コーナーへよつ』そ～。ここでは僕がこの小説のみんなにむちやぶつな質問をしていくコーナーだよ～
よ～し早速いってみよつ～

今日はこの人～』

姫路瑞希「え？」何處ですか？』

やあ姫路さん。質問コーナーへよつ』や

「明久君！？これは一体」

では質問いくよ～

「へー?あ、はい!」

Q 姫路さんの得意料理（殺人兵器）は何？

「得意料理ですか？そうですね…あつハンバーグです！少し酸味を加える為に『しゃ～りょ～！』あの明久君?」

質問ありがとう姫路さん。ではバイバーイ！

「あの私まだ内容を ひゃああああ」

危険な回答をした方は紐無しバンジーで空から地上へ帰つてもらいまーす！

「 酷いです明久君 ！」

次回は誰でしょ?ー?お楽しみに~

四問田・食費パートヒスタンガン？

「… うー」

映画館から出て缶コーヒーを買つ。うそ… 」の話題結構好きなんだよね

姫路さん達は映画を観ていろ… まあ恋愛者だから僕はこいつして抜け出していくんだけど…

「 」の後どうじよつか…

まずは後ろにいる清水さんを排除して… 昼飯だよな… うーん。

缶コーヒーを飲みながらソファーに座つた。立つても仕方ないし…

「 でも美波達にクレープ奢りなきやな

「放しなさいーー」の豚野… あやん…」

清水さんの額にパンを炸裂させた後素早く気絶させた。まあ明

田には気がついてるだろ？

少し考えに更けていると見知った顔が僕に気づき近づいてきた

「吉井君〜！」

「赤咲さん？」

「隣り座るね？」

赤咲さんは微笑みながら隣りに座った。赤咲さんの格好はパーカーとミニスカートと言った女性らしい格好だ

赤咲さんはここにしながら少しつられて見ている。ああ…これは離れた方がいいな

「吉井君… 今日はどうしてこられるの？」

普段はポーテールだが今日はおろしてこるせいが違つて見える…

「『トートじゃない』テートをしてるんだ」

「はへ？」

頭に？マークを浮かべる赤咲さん…はあ 事実を言つていいんだけ
ぢやつぱりわからないよね

「今は映画が終わるのを待つてゐるんだ。赤咲さんは？」

「私？うーん 私も彼氏とデートかなあ…」

「へえ～。でも彼氏は一緒にじゃないの？」

それが原因だったのか赤咲さんはビクリとしながら必死に顔を逸ら
した

「えっと…彼氏は…」

そんなに表情を硬くしなくていいのに…。あつやつぱり彼氏がい
ないのかな…だったら何で嘘を

「赤咲さん彼氏いないでしょ？」

「うーーー？ そ、 そんなことないよ…」

「 本音を言つた方が楽になるナビなあ…」

「 ふえーー？ 本当ーー？」

赤咲さんは顔を赤くしながら必死にこいつを見つめてくる
ところがこの人流されやすいんだけどーー？

「うー。 僕は別に言ふらしたりしないしね…」

「 本当ーー？」

「 … 嘘ついたって何もメリットなんかないでしょ？」

『メリットなら沢山あるけどね… の人みたいに

「良かつたあ……」めんない。本当は彼氏なんていなーの

「やつばつ……」

「一ヒーを再び口に含みながらじっと彼女を見た

「で、何で嘘をついたのさ」

「それは……あひ」

顔を赤くしながら理由をあれこれ考へてくる。ん? 彼氏いない…僕の所に来た…なるほど

「赤咲さん…告白されたんだね…」

「凄い……なんでわかったの!…?」

言ひやつたよ…自分で認めてるね…いや、後からしまったって顔それでも…

「実は昨日…同級生から告白を

「同級生… FFF団の誰かか」

「ムツツリー一や秀吉は恋愛にあまり興味を示さない…雄一には霧島さんがいるからあいつらにつながることになる」

「それで断りうとしたんだけど…「まくいかなくて」

「なるほど… その天然さのせいで悪い方に繋がったんだね」

「私、天然じゃないよお…」

涙目で訴えてきても天然は天然だ…言葉使いにそれがでている…

「吉井君の意地悪う…」

「意地悪で結構結構」

赤咲さんは頬をふくらと膨らませながら下を向いた

「それで彼氏がいるって言ひやつて…今日…映画館前で会いたいつて」

「はあ ベターだなそいつも。ふられたならおとなしく引き下がれないのかな…」

しつこい奴らは嫌いだ…いくら振り払つてもしがみつく…惨めとか言いようがないよ

ソファーから立ち上がって缶を捨てた後静かに歩き出す

これは彼女の問題だ。僕がビリーハンツが必要はない…

「……」

あーもう一調子が狂うなあ！素直に言つてくれればいいの

足を止めて彼女の方に振り向く。自分のこいつこいつ所がたまに嫌になるよ…

「はあ…僕で良ければ…今日一日彼氏になつてあげるよっ。」

赤咲さんは俯いていた顔をガバッと上げてこっちをまじまじと見つめてきた
う…ちよつとびっくりしたな

「本当に…？」

「ちよつ…顔が近いって…。まあ僕だけじつといい奴は嫌いだしな。
でも今回だけだからね」

手を差し出すと彼女の笑みはとても華やかになつた

「……………ありがと、吉井君。」

そつと赤咲さん思い切り抱きつこうとした…って公衆の前で何やつしてゐるか…

「…ふがふつああー（はなれりおおー）」

美波達に連絡を入れた後…赤咲さんと歩きだした

やれやれ面倒なことになつた…明日は異端審問確定だな…

四題目・食費とバーとスタンガン？（前書き）

『僕は異性が好きになれない…だって彼女達は…』

凶魔田・食費バー・スタンガン

「吉井君… いややつよー。」

「へえ… 射撃ゲームか」

赤咲さんの「一日彼氏とこうじて僕らはゲームセンター」をしていた。
まあ余りまで時間があるし、形からと言ひしね
少しふれ合つてなるべく彼氏らしこうになる為だ

「私お金ですねー。」

「ちよつと待つた

やつは黒布から血田玉を取つてやつと赤咲さんの手を掴んだ

「僕が出すよ… 」の財布もやつこうに準備した訳だからね

美波と姫路さんは悪いけど、お金は赤咲さんの為に使つてしまつ

「い」めんね…私のせいだ

「……」

彼女の言葉を受け流しながら百円玉を入れる。最近のゲームは素晴らしいや…百円玉一つで対戦ができる

「さて…ゲームを始めよつ。悲しい気分なんてゲームをやれば消え
るわ」

力チャヤリと赤い銃を手に持ちフツと笑った

「そりだねーよーし負けないぞおー!」

再び笑顔になつた彼女を見た後、画面へと視線を戻す

さて…ゲーマーの力見せてあげるよー!

「ちよつーっ、タンマ吉井君ー！」

「手加減無しだ！」

「酷いーー！」

ゲームが始まった瞬間、勝敗は見えていた。まあ僕に射撃ゲームで勝つなんてまず無理だ

プレイと同時に銃で画面に映されている赤咲さんを狙つ

最初は手加減しようと一秒で一発打つてごくごくしたんだけど…

何かスイッチが入ったのか気づけば一秒で二十発打っていた…勿論赤咲さんは打たれて反撃できない

まさに鬼畜と呼ぶにふさわしいね

「やつー回ーーやつー回やつー」

「参めになるだけだよ？」

「うーーー今度は負けないよー。」

なかなか挑戦的じゃないか…なら僕だって容赦はしない！

「喰らえー！秘技乱れ桜あああー。」

「ふええー？攻撃が見えなことおおー。」

WIN

画面に映し出された三文字を見て鋭く笑う僕と悔しい顔をしながらも笑う赤咲さん

ゲームはやつぱり素晴らしい…交流が深まる

「楽しかったね…吉井君ゲーム強すぎだよお…」

「僕はゲームだからね。あらゆるゲームを攻略しているんだ」

「…何かどこかの落とし神とセリフがかぶったような。うん気にするな…」

「あはは…羨ましいなあ。」

「…僕からしたら君の家事スキルが羨ましいよ」

「そうだね…」

よし…いい感じだ。後はこの関係をこのままキープして…

「ねえ吉井君…」

「何かな?」

赤咲さんはにこりと笑って僕の手を握った…え?ちょっと…わわわ

「もつと吉井君のこと知りたいな…」

「……？」

な、何だこのイベント！？想定外だぞ！？

落ち着け……まずは呼吸を整えて……

「駄目……かな？」

赤咲さんは手を潤ませながらじっとを見つめる。あせるな……冷静に彼女に意志を伝えなきゃ

「あ、当たり前だよ。僕は詳しく自分のことを語りつもりはないしそれに手を握られたって何もしないよ……だって僕は君のことは好きになれないから」

赤咲さんはその言葉に打たれたような反応したがすぐに笑った

「やうなんだ……でもありがとー。」

赤咲さんの言葉にピクッとして反応しまじまじと彼女を見つめた

いやだつて……普通はあんなこと言われたらいち誰だつて落ち込むはずだ

「……ふられたんだぞ？悲しいんじやないのか？」

「うん。だつて吉井君は吉井君だから。吉井君が嫌ならすんなり引くよ私

その言葉はまるで鋭い針が突き刺さるような痛みがした……そつか……僕もその方が有り難い

でも……これだけは伝えないとね

「……でも赤咲さん。ちゃんと自分の気持ちを伝えなきゃ駄目だよ？」

「口ごと優しくそして切なく微笑むと彼女は元気よく頷き離れて行つた

一日彼氏はお終い……彼女との関係もこれで終わりだ……

「でも……僕は」

さつき握られた手の平を眺める…僕はどこかで求めてる気がする

…いや

「気のせいか」

彼女の後ろ姿を見送った後、軽く微笑みゲームセンターに戻つて行つた

雄一はボロボロになりながらみかん箱に突っ伏していた。
ドンマイ雄一…

赤咲さんはあの出来事以来普通に話している
まあ話しているっても友人関係としてね

赤咲さんはあの後ちゃんと断つたらしい。全く…最初から意志が強
ければ良かったのに…おかげでこっちは振り回されて大変だったよ

で

僕は今、姫路さんと美波に詰め寄られている

まあ抜け出した訳だしそうや怒るのはわかるけど…

「明久君酷いです！」

「そりよー罰として来週はパスタと映画よー。」

「ちょっと待ったああ！それはあまりにも理不尽…ぐあああ腕があ
あ」

僕の不幸な朝は相変わらずだ…

五問目・朝食と決まりと月夜

ふんわりと優しい光が部屋に照らされたことで僕は今の時間帯に気がついた

「もう朝か…」

手に持っていたゲームのコントローラーを置き外を眺める。太陽が輝きさつきまで暗かつた空は青く、雲も浮いている

時計を見るとその針は6時を示していた。どうやら僕は7時間以上ゲームをやっていたのか…面白いから睡眠なんか取る暇無かったよ

「まあ…眠らないから大丈夫だけど」

理由は鉄人にある…20時から朝までずっとゲームをして授業中眠つていたら案の定鉄人にかなりしごかれ…以来眠れないという状態になってしまった

まあ僕にとつては好都合だし…別にきつともない。僕だけに備わっているゲームをするためのスキルだ！

「このマジックのゲームは面白いな…恋愛、アクション、推理、コメटィー…ヒジヤンルは様々どれも夢中になってしまつ。今日帰つたら積みゲーになつてゐる恋愛とアクションをやらないと

「まあ…今は朝食を作らなきゃな」

最近バイトを始めたんだ。結構自給がよくて土日に設定してくる…平日だと自由時間が減るからだ

そこの店長がとても気前よく…ゲームをわかつてくれていて…僕に
とつては師匠のような存在にあたる

ゲームは最高の文化だ…これほど素晴らしいものは存在しない！

うん？桂木とかぶつている？まあ中の人と同じだから…仕方ないさ

「頂きます」

今日の朝食は「飯にみそ汁、そして焼き鮭」とこつた定番の朝食だ

「飯を口に含み焼き鮭をパクリと食べる

うーん… 」の塩加減と「飯の質… とても美味しい…

これは定番の朝食確定だね

「 … 」のみや汁も「味出したかな… やっぱり豆腐が一番だ」

明日は洋風にしようか… 考えるだけで楽しみだ

「 」

食器を手早く洗ってからすばやく弁当を作つておいたものを詰める。

今日のイチオシはグラタンだ…つーんこい香りだよ

弁当を作り終えたらトレーを付けて経済について確認する

これは必ず僕がやることの一つだ

なんでも……最近は物価の上昇が激しいな……うそ?

「まああー。」

ガタンと椅子を倒してトレーニングする

なんてことだー。『西に恋して』の最新作が発売だー? 田中田中ー。
値段値段ー。

「これからゲームは最高なんだー。」

マンションから出て学園に向かう…勿論ゲームをやっている

僕は登下校、家では基本的にゲームをする。沢山あるからどんどんやらないやせ…

それに登下校なら誰にも文句言われないし時間を合わせればゆっくりと自然の風に包まれながら有意義にできるしね

「とつあえずーー！ＤＤＳでしょー！ＰＺＰでしょー！」

これが僕の必須アイテムだーちなみに鉄人との出来事から上手く隠している

「とつあえず今日も遊ぶぞーー！」

朝食を作り、経済を確認し、ゲームを沢山する

これが僕の一日の決まりだー！あー！邪魔できるならやつてみろー！

「…………どこへぐださーいーーー！」

「え？ うわあああ

振り向いた突如きなり女性とぶつかり地面に尻餅をついた…朝から不幸だ…

「痛たた…う、あああ！僕の…ゲームがああー！」

そつきの衝撃でPSPが吹き飛び見事に地面に衝突…終わった

「終わった……」誰だあー。」

「「」みんなわー。」

素早く握手も起き上がりペココと頭を下げた

……」人は確か

「君……月夜さん？」

「え？ 吉井さん！？」

月夜さんは驚いたように田中をパチクリさせていた

「…………はー。」みんなわー。ちょっと急いでるんですねー。」

月夜さんはすばやく立ち上がり、走って……うわあ

「ぐふー。」

突撃され中を舞つて僕は地面に激突した

痛つ……なんて馬鹿力だ……

月夜さんは無視するかのようにダダダタと走り去つていった

なんて奴だ！……

ゲームは壊れる……起き飛ばされる……つい最悪な朝だ

「はあ……仕方ない4DSDだけでも……

う、あいああー？ロボがああああー！」

ぐ…さつきの激突で折れたのか…僕の僕の

ゲームがあ…

「幸せな朝があああ！」

「「ミクッ！」

はは…めげないめげないぞ！

「よーし今から新しいのを買ひにこい！」

そんでもってこれとこれをクリアしなくては

ふ
…
は

「ははははー」

学園に向かっていた足は回れ右をして
ゲームショップへと向かった

「待つてろー僕のゲームウゥウーはははははー」

六問田・説教と妄想少女と打倒玉野（前書き）

吉井明久のみんなに質問コーナー！

よつこみなわんー今田もこいつみよー！

今日の餌食…ゲフン…ゲストはこの方ー！

赤咲鈴「凄ーーー！」本物に靈の上なんだー！」

よつこみなわんー今田もこいつみよー！

鈴「ホーーー！」

では質問です

〇鈴の好きなタイプって誰かな？

「ふうー…」そ、それは…

明久君みたいな人　／＼

はいわようなら～

鈴「ひやああああー酷いー」

全く諦めたんじゃないのか…そんなこと言つたらFFF団の餌食になつてしまつよ

オホン…次回は誰でしょ’つ?

お楽しみに！

六問目・説教と妄想少女と打倒玉野

ため息をつくと幸せが逃げる…『もつともだ

なんせ僕は…ゲームショップに行つたことで遅刻し…鉄人にじごかれた後、軽くため息をついたらいきなり転んで4DSが碎けたからだ

せつかく…せつかく買ったのにいい！

あのアイアンマンめがあああ！

「くつそ…また買い直しだ…しかも来週くらいだから…このソフトとはしばらくお別れか…」
「ひつ」

それにもあのアイアンマン本当に手加減がないな…僕はただゲームショップに行って遅れただけなのになんだよ…このでかいなん
こぶ

はあ…もういいや。復讐なんて馬鹿馬鹿しいし、テストで見返して

やるか

「あら…おはよう吉井君」

廊下を歩いていたら現国の竹内と出会った…この人アニメのバカテスだと結構美人だよな…まあどうでもいいことだが

「…? 今何か言った?」

「いえ……それより次の授業って僕らのクラスですよね?」

竹内先生は首を傾げながら「そつだけど」と言った。よし…これはチャンスだな

「そうですか。ちょっと確認しておきたかったので」

一礼してからすぐに歩き出す。竹内先生は一コ一コと見送っていた

笑顔か…そんなもの作りでしかない…

相変わらずみすぼらしいな…

教室をじっと睨みながら扉に手を掛ける。そのままガラリと開けて
中に入る

誰もいない…

「どうしたんだろ?」

「おはつよーひー」

不意に後ろから声をかけられ素早く振り向いた

そこには「口」しながら茶髪のボーテールと赤いクリアレッド
が印象的な彼女がいた

「なんだ…鈴か」

「なんだ…つて酷いなー明久君」

むくれる彼女を軽く笑い切りを見回した

「みんなは何処?」

「あーそのことなんだけどねー

『坂本を追えーー。』

『野郎…朝から霧島をといイチャイチャしゃがつて』

『『黒原も許さんー。』』

「こんな感じ」

「ああ…」

いつもの風景に納得しながらおなじみのみかん箱の前座つた
はあ……やっぱ西心地悪こな

「おはようございます明久君」

「おはようアキ」

「おはよーひなのじゅ」

三人が教室に戻ってきたのを軽く確認しすぐに教科書を開いた

「明久君て勉強家なんだね！」

鈴がじつとのぞき込んでくる。ちなみに今は現国を勉強している

「別に…ただあいつらみたいに異端審問とかいづ馬鹿馬鹿しい」と
よりは断然マシだからね

「あはは…そりだよね。私もあーいつのは苦手かな」

数十秒もたたないうちに叫び声が聞こえたのは言つまでもない

わつわからん気になつてゐるんだけど

「 」

僕…凄く見つめられてないかな?いや……姫路さんや美波とかのじやなくて…なんといつか

むず痒いような視線だ。

ギギギとブヨキのように振り向いて見ると…

「 」

月夜さんがじつと見つめてきている…な、なんだ…僕何かしたつけ?

s.i.d.e 月夜

芦井ちゃんとかひじこ二歳すよね…せいか…ひかわを覗いてる。

ベリーホームヒルー。

『月夜ちゃん…わからない所があつたら教えてあげるよ』

『え…？ いいんですか！？』

『ああ…勿論…体でね』

つてなつかしつたりびひましょー！

(な、なんだ…凄く寒気が)

吉井君はすぐに黒板の方を向いて勉強に集中しています…

吉井君…かつ…いいですか…初めて会った時から凄く気になつてたんだけど…

そういうえば私…まだまともに話しません…

「じゃあ」の問題を…吉井君…

竹内先生は吉井君を指名して…吉井君はすぐつと立ち上りました

「うわあ……スラリとした体格……そして眼鏡をかけている吉井君はますます素敵です

「あ……僕がやつますよ」

竹内先生は黒板を消そうとしていたのですが吉井君が率先して竹内先生の手に自分の手……ををを！？

「あら……ありがとう吉井君」

「いえ……」

『吉井君て背が大きいのですね…』

『先生は大きい人が好みですか?』

『え…?ひやあ…駄目ですよ…生徒と教師じゃ…』

『先生…愛に年の差なんて関係ありませんよ…』

『吉井君／／／』

『いいですか?先生』

『承認します／＼』

わざとこんな展開が…

「せひ…」

「…？光奈ちゃん…え、どうしたの…？」

『『吉井め…』』

『明久君…お詫しましょうね』

『アキ…竹内先生と』

「わああー友里恵ちゃんー」クラスがカオスに…」

「やめろー友里恵ー俺はお前なんかファーストをやるつもりはないー」

「陽哉君～」

「うわああー」

「…カオスだ…」

六問目・説教と妄想少女と打倒玉野？

『これより異端審問を行つ

『『『イスラム』』』

「何がイスラムだ…頭悪いのに変な単語覚えやがつて」

フードをかぶり陽哉と雄一を裁いているみんなに呆れながら教科書
な意識をうつした

みんなは僕と竹内先生が何があると思つてゐるのか…？はあ…本当に頭がおかしいな

僕が竹内先生に接してゐるのはこれから試験の為だ
恋愛感情など持ちたくもないよ

「相変わらずね…あいつら」

「はい。元気いつぱいですね」

何で二人が裁かれているのかは単純だ

授業中、童貞を必死に守っていた陽哉…、

姫路さんと話しあし雰囲気がいいだけで田をつけられた雄一

まあいつものことだ…

「明久君……勉強教えて～」

「何だよ鈴…僕は今忙しいんだけど…」

は…?近い…寄るなあああ!

「私だけ試験でいい点を取つてみんなを助けてあげるんだからー。」

「……こいつと近寄つて顔のギリギリまでこる……ひい……

「あ…………ううう」

「くそ……なんでこんなに捕られるのが弱いんだよ僕はー。」

「仕方ないなあ……ちゅうただけだからね」

「あっがとうーーー。」

「だあああー抱きつかなあーーー。」

「く……胸を押し付けてやがって……くそ悪魔だ

「で、何を勉強したこの子」

鈴を振り払い眼鏡をくいつとあげてじつと見る
鈴は二コ一コとしながらいつのまにか持つてた鞄から教科書を取り
出した

ま、まさか！？

「勿論…保健…体育！」

その瞬間…全ての視線が集まつた…まずい！

「ダッシュ！」

『『吉井を殺せええええ！』』

『吉井を八つ裂きに！』

『坂本をミンチにー』

『関原を粉々にいいー』

くそーー非異端者がーー理不尽にも程があるだりおおーーーー.

「吉井さん…はうーー」

s.i.d.e 光奈

「鈴ちゃん 鈴ちゃん」

「何？光奈ちゃん」

私はみんながいなくなつた後、のぼほんと座つている光奈ちゃんに話しかけました

理由は勿論…

「吉井ちゃんと勉強教えるの上手？」

「うそ…凄く上手くて…はわ…／＼」

おお…鈴ちゃんが真っ赤になりましたよ…

勉強が上手いんですか…

『 あお鈴…たつぷりと教えてあげるよ』

『 ああ…明久君…そこは』

『 じじがわからないんだろ?』

『 ひやあ…もっと実用的に教えてほしいな…』

『 へえ…なら今日は寝かさないぞ?』

「えく…あくへーーー」

あつ……つこヨダレが…

「光榮ひや……ん?」

ああ…瓶井ちゃんと他の方を見るとこめかういとやら想いつてしま
いますう…
鈴ちゃんは瓶井ちゃんと瓶皿をつぶらられたと聞いてこまつた…

私はびひなんんでしょひね…

こんな私じゃ……きっと

s.i.d e 明久

「で、こいつなるんだ……」

頬をすりながらじっと周りを見渡す

何かを妄想している月夜さん…地面に埋まっているみんな

はあ……改めて思つけど普通じゃないな…このクラス

「なるほど… 明久にしては凄いな」

「実にわかりやすいのじゃ」

「……教師並み」

「おおーつまりつか！」

「そう… 憐いじやないか陽哉！」

僕らは竹内先生の授業終了後、軽く復習していた。まあ僕がみんなに教える立場なんだけど…

陽哉は理解が早い… 流石同士だ… 雄一達も頷きながらペンを走らせる

僕は軽くノートをまとめてみんなに説明している… 次は… 鉄人の授業か… ちょっとどいいや

「じゃあノート置いておくから…」

「ん？ 明久どこに行くんだ？」

「うーん、まだ決まってない」

雄一が立ち上がり、興味深そうな顔をしている…まあいいか

「ちょっとね…雄一も来る？」

「いいのか？ 内密などじやねーのかよ」

「ああ。雄一には話しておきたいしね」

「ヤリと笑うと雄一は少し警戒はしていたけどフツッと笑った

「鉄人の授業がサボれるなら行かせてもらいつか」

僕と雄一はガラリとドアを開ける。その時、月夜さんが目に入った

が彼女はすぐに元を逸らした

なるほどな…

「明久君何処か行くんですか？」

「西村先生の授業をサボる気？」

出る前に近くにいた一人に呼び止められた…はあ…まあいいか

「ちよっとね

それだけ言ってすぐに教室から出て行く。君らには縁も縁もないことだ

「で、何を考えているんだ明久」

雄一の言葉にピタリと足を止め振り返る

「やのわわかる」

「まか…俺らを信用していないのにか？」

「挑発しようとしたって無駄だぜ雄一? なんなら帰つてもいいんだよ。」

「…………」

雄一の悔しそうな反応にニヤリと笑いながら再び歩き出す
僕らが向かっているのは

竹内先生の所だ……

「気が変わったよ雄一……」

「あ?」

「何を考えているのか話してやるよ……」

そこで一度言葉を切つて雄一をじっと見る。奴は黙りながら「ひら

を見ている

。……さて少しかつたことだし本題に入ろうか

「僕はロクラスと試験召喚戦争を起こす

戦略的な元神童か…

だが、そんなの頼りにするつもりはない

この試験召喚戦争…僕が勝利へ導いてやる

六問目・説教と妄想少女と打倒玉野？

「ロクラスに宣戦布告だと？」

雄一は動搖しているのか言葉が強くなっていた

僕はそれをニヤリと笑い口を開く

「そりゃ。ロクラスと試験召喚戦争をするのさ」

「アツキー 達遅いね～」

「ああ…西村大分切れているんだが…」

みんなも硬直している…それほど今の西村はやばい…明久…雄一

死ぬなよ?

side 明久

「お前はついに馬鹿を極めたか?俺達は召喚戦争に負けて3ヶ月は

できないはずだ

思つた通りの反応……無理ないか……普通なら誰でもそう考える

だが

「それがもしできると言つたら？」

「何？」

伊達眼鏡を外しじつと雄一を見る。雄一は僕を睨みつけた

「お前……何をした」

「……ババアと交渉したのさ」

迷いなどない僕の言葉に雄一は目を見開いた。…そり、試験召喚戦争の鍵を握ってるのはあのカヲルババアだ

「だが一体どうやって…まさかお前」

「流石は神童…か。そうさ 僕が竹内先生と接していたのには理由があるのさ」

廊下を再び歩き出しながら窓を眺める…

「…確かに竹内は…カヲルの研究アシストをしたと聞いたことが…まさか！」

「そうだ。カヲルを一番説得できるのは竹内…だから僕は彼女と友好的に接しカヲルに挽回のチャンスを仕掛けさせた」

そしてカヲルは見事に引っかかるてくれたよ。竹内は大事なアシスト…だからいつもお世話になっている竹内に下手な態度はとれない

そして僕は竹内にどんな奴かを聞いた…だからババアはすでに僕の手の中にあるのさ

「明久…お前…」

「悪趣味だと言われても構わない…だが僕だってあの設備はうんざりだ…」

「なるほどな…なら」の試験召喚戦争…お前が始めたんだ。主導権をくれてやる…」

「素直に受け取つておへよ雄一」

「雄一」は少しため息をつきながら指を指した

「今日はお前が指揮を勤める…ただし負けは許せん」

「ふ…いこよ雄一…君は代表だ。王は座つて待つてな

互いにニヤリと薄く笑いガツと腕を叩き合つた

「これから僕は竹内先生に会う。雄一は教室に帰つて須川に宣戦布告をやらせるんだ」

「へいへい。わかりましたよリーダー」

雄一はくるりと方向転換し教室へ戻つて行く。馬鹿め…今の状況をわかっているのかあいつは

『明久あああああ…』

甲高い悲鳴声が聞こえ僕は腹を押さえながら笑いをこらえた

いかんいかん…つこおかしそぎて

「わあ……全て整った…」

後は奴を攻略すれば必ず勝てる…だがあいつは常識を越えてこる…

「エハハ…トモに近づけば命取りだ…」

顎に手を当て考えながら職員室へと向かう…

これが終わったら学食で今日は済ませよう

大方…雄一が仕返しを企てるだらしね

「竹内先生？」

「竹内先生？」

おかしいな……職員室に面のせすじや……

竹内はにこにこと笑いながら近づいてくる。竹内の所へ訪れたのはDクラスに勝つ為なんだけど

「……先生……ん……？」

な、なんだ！？何が起きた……んだ？

竹内先生に抱きつかれていたことに気づいたのは数秒してからだった

「吉井君…」

「…あ」

「あ……//」

何がどうなつてゐの～！？…「…胸が当たつて

「先生？//」

「…あ…めんなさい…早く補習しましょ～//」

やばい…まさか教師にフラグ立てちゃった？

「……／＼／＼」

熱くなつた頬をペシペシと叩きながら僕は竹内先生と今は開いている補習室へと向かつた

何か問題が発生しないといいんだけどね…

「あ…吉井頬」

「はい…」

竹内先生は振り返つて笑みをこぼしている…く、また顔が熱くなる

「お食一緒に食べよつか?」

「はー??」

....まあい。フラグが完全しつつある....

雄一達にバレたら...へむつ最悪な結果しか思い浮かばないや....

「.....えつとー」

「あーーまた私つたりーー

どうするんだ...こんな状態じゃ...切り札となるの日夜をとと申良へで
れるかわからない....

頭をかきながらとつあえず補習室へと向かつた

六問目・説教と妄想少女と打倒玉野？

「……よし。次は彼女だ」

補習室から出た僕は教科書を手に持ちスタスタと廊下を歩いていた。まず竹内に深く入りすぎたのはミスだった…なんとか説得したが…雄一達に知られてはいるよな?

「月夜さんは徐々に仲良くなるつもりだったが…考えを変えよう

開戦は午後だ…それまでに彼女と仲良くなれるかわからない…というより補習に時間を使いすぎたようだ…これじゃあ間に合わない

そこで作戦を変更する。今回Dクラスとは現国で勝負するつもりだ。奴らに指導権は与えない…竹内とはババア攻略の為に…だからついでだから現国にしようとなつたわけだ

月夜さんは現国を一番の主力としている…だからこそ今回は彼女がキーマンなんだ

「問題は……どうやって彼女とタッグを組むかだ……」

一気に終わらせる為に玉野美紀を攻略しないといけない。鈴でも良いんだけど鈴はあいにく現国を主力としていない。だから月夜さんとタッグを組み美紀にぶつける

僕が美紀と戦えば確実に負ける。何故なら彼女は…

「試験召喚をしてもリアルで攻撃を仕掛けてくる…」

トライアマだ。彼女がDクラスで一番切り札の位置にいる。なら僕が戦えないなら月夜さんに戦つてもうしかない
美紀の奴。僕が言ったこと絶対守っていないはずだからね…

「月夜さんと上手くいけば勝利のルートは見えたも同然なんだけどなあ」

『 やあ月夜さん…』

『 吉井さん?』

『 …なんでもない』

駄目だ。ちまちまやつてたら僕は必ず近づくのをやめてしまつよ…
おのれ…なんで現国は月夜さんだけなんだあああ…

陽哉は数学なんだが…教師は変えないつもりだ…つまり…Dクラス
の教室へ一気に押し入る…そこは考えてある。月夜さん以外をみん
な戦わせる
隊長なんか関係ない…独自行動だ！

教師には数学の船越、化学の布施を用意して…竹内は僕が誘導する
今回、陽哉には好きに暴れてもいいとしよう

「後は月夜さんか……仕方ない。これだけは本当にしたくなかったけど」

落とし神のように彼女を一瞬で攻略する！…そつと決まれば実行あるのみだ

『ガラリ』

「さーて作戦を実行だ！……ん？」

周りはしんと静かだ…おかしいな…宣戦布告は…なんだやつてくれてるじゃないか。証拠に須川はボロボロだよ…ならなんでみんなはそんなに怯えてー

あ

「Welcome」

「
鉄人
」

最悪な計算ミスだ…

s.i.d.e 陽哉

「明久大丈夫か…？」

俺は腫れた頬を押さえている明久に声をかけた…「どうやつたらあんなことになんだけよ…まるで虫歯のようにふつくらしている雄一に関しては畳に顔が埋まつていて言葉が出ないぜ…」

「痛てえ…あのアイアンマンめ」

「お主もこゝなことがあるとわの…」

「…………こつもは眞面目」

へえ……明久って色んな性格なんだな……本当に面白い奴だ

「くわ……隠してた鈴の……『眞が……』

「「何ー?」」

「ベストアングルだつたんだけどなあ……」

「…………残念すわる」

「くわ……西村めえ」

エロに関しては大歓迎だ……ん？変態？違うな……俺や明久、ムツツリ
——は紳士だ！！

「……ええ！？ 明久君いつの間にーーー」

鈴は慌てながらスカートを押さえた…いやなんで押さえる…

「……まあいいか。ムツツリーーー 鈴のを一ダース頼むよ」

「…………まいどあり」

「おお…流石明久だな…？寒氣がするのは何故だ…！」

「ふええー！？／＼」

鈴はワタワタと慌てていて、光奈は何かを妄想しているようだ。友里恵は友里恵で顔を赤くしてゐるし、雄一は相変わらずだし

「じゃが…明久良いのか？」

「何が…？」

「あの一人の」とじゃよ」

二人？…つおあああー姫路と島田…殺氣やばいだろー？姫路はここにこ笑いながら釘バット…島田はステイックを持つてゐる。怖い！怖いつて！

「明久君…何で鈴ちゃんばかりなんですか？」

「正直に言えば首飛びで勘弁してあげるわ」

おいおい… 島田に関しては危ないだろ

だが明久は平然と振り向き彼女達を軽く睨んだ

「勘違いするな。僕は女子は嫌いだがエロは好きだ。鈴の写真を買う理由は簡単」

一度言葉を区切りすつと息を吸う

「彼女がグラビア以上の体だからだあああああ！」

『才才才才才才才才才才才才才才才！』

周りから拍手が起る……流石だ明久！俺も感動したぜ！

「は……わわ。あ……う／＼／＼／＼／＼」

鈴は真っ赤になり顔から湯気を出しながら俯いている

「お主……色々な意味で凄いの……」

「…………」

ん？姫路と島田はどうしたんだ？すげー絶望状態なんだけど……そして雄一……いい加減帰つてこい！じゃなきや霧島呼ぶぜ！

「……ん？お前ひどいかしたのか？」

早つー！すぐに復活しあがつた。でも木が刺さってるんだが……あ
若干血が流れてる

「雄」……その姿はなんだよ

「あ……？お前」……その腫れた頬はなんだ……」

「「まあ……」」

二人は深くため息をつきながら俺達を見た
？何だその変な目は……

「まあいいや……そろそろ戦争を始める……か

明久はニヤリと笑いながら雄一を見た

「ああ……じゃあ後は頼んだぞ」

「おい雄一……お前がリーダーだろ?」

「何のことや?」

そう言った後、あいつは前を見るように促した。そこには黒板に凄い早さで何かを書いている明久がいた

「みんな……」の指示通りに動けば必ず勝てる……

『でもよ……観察処分者だらあいつ』

『馬鹿に任せて大丈夫か?』

『まさかあいつ…月夜さんを独り占めするきじや』

『いや…あいつ女子には興味ないって言つてたし』

などとザワザワと教室が騒がしくなってきた…ん?俺は船越を連れて暴れろか…

下剋上か…面白いじゃん!

「システムデスクが欲しいなら…僕の言つ通りに…いらないならすぐ消えろ」

明久はそう言って教室から出て行つた…開戦は午後

みんなの田は本氣だ…

六問三・四クラス戦完結

「えつ……と。」リリードによね。

吉井ちゃんから田校舎の教室に来るよう浮び出されました。何でしょ
う。

『やあ由夜ちゃん……待ってたよ』

『吉井ちゃん……えいへん……／＼』

『可愛い顔だ。もつと近くで見せてよ』

「はわわわー駄目駄目！そんなことありつる訳ないじゃないですか
！…」

バシバシと頬を叩いてガラリと教室を開きました

「吉井さん…？」

目の前には眼鏡をかけている吉井さんが立つてこちらを見つめています

「待つてたよ…」

え…？

わ…こよいよ開戦の時だ。

みんなもじつと廊下を見つめている。よし…『仮面』十分だな

「いいかいみんな。作戦は指示した通りだ…勝負は一瞬で決めるつもりだからみんな腹をくくれ！」

『オオオオオオ…』

『Dクラスなんかに負けるか！－』

『そりだ！俺達の力見せてやるつぜー。』

「では先生方よろしくお願ひします」

三人の教師は二つと頷く。竹内は上手く誘導する為手を握っている

その隣には肩に抱きつく月夜さんだ。二つとしていくが…
まあ大丈夫か

「陽哉！君には援護をお願いする」

陽哉は一ツと笑い拳を突き出した

「任せろー。」

よし……後は美紀か……あいつがどんな手段を考えているかはよくわからぬが……そこはどうにかするしかない！

雄一は縄で縛つて教室で待機して貰つている

悲鳴が聞こえるが知らんな……

『キーンゴーン…』

「来た！みんな突撃だ！」

その言葉と同時に全員が走り出した。相手の教室との距離は近い方が良い。だから…運動神経が良い奴を送り出す！

『『ウオオオー！』』

「来たぞ！Fクラスの連中だ！！」

「え…教室前で待機とは…挑発してくれぬじゃないか…

だが…！

「ああ……こけ陽哉！」

「しゃああー船越先生召喚許可をー。」

まず先陣として陽哉を送り一気に戦況をひっくり返すのとする。

陽哉は船越先生の隣に立ちDクラスを見据える

『承認しますー。』

「しゃああー関原陽哉がDクラスの半分と数学で勝負だー。」

「えええー?」

陽哉はバツと空中で回転してキーワードを喋った

「サモンー」

サモン（試獣召喚）…」の戦争の時に使用する分身を呼び出すキーワード…陽哉の召喚獣は体のあちこちがメカになっている

まあター＝ミネータと並ぶのがふさわしいかな

関原陽哉 Fクラス
数学 360

『Aクラス以上じゃないのか！？』

たじろくクラス…はは…いいぞ。もつと震えさせてやる

「美波ー君も続くんだー！」

「わかつてゐわよーサモンー！」

島田美波 Fクラス
数学 290

『あいつもかー！？』

『うわー、やばいんだじゃない！？』

よし…ハンティングが見えた…！

「今だみんな！」

『みんな！吉井達を導け！』

『我らに勝利を…』

『『サモン…』』

Fクラス生徒

数学

100×23人

点数は低いがみんな進化している…まあこれが限界だと思つけどね…

「竹内… ちょっとだけ我慢して下さい」

「え…? なぜか…」

竹内を抱き上げ月夜と一緒に真ん中を走る...みんなが戦争をしているから堂々と通ることが可能だ!!

『戦死者は補習!』

『それからおまえのやつだ』

後ろでは陽哉にやられたのかDクラス生徒の悲鳴が聞こえた

『お姉様～！～』

『いやああー』

こんな悲鳴も聞こえたがまあ無視しそう
そして月夜：お前は妄想するな

「平賀！覚悟しろ！」

「よ、吉井ー？」

さて一人となつた平賀…と言つても…

「やつぱりいたか…美紀」

竹内をするりと下ろしてじつと見る。まあまあ…顔を赤くして…さぞかし僕に女装させたいんだろうな

「月夜ー」

「月夜光奈がDクラス玉野美紀さんに現国で勝負ー。」

「続けてFクラス吉井明久が現国で平賀と勝負ー。」

「何……しまつ……」

遅い平賀……今更何しようとは無駄だ！

「サモン……」

この勝負……貰った

Fクラス
現代文 320
月夜光奈

VS

Dクラス
現代文 195
玉野美紀

VS

Fクラス
現代文 650
吉井明久

VS

Dクラス
現代文 200
平賀源氏

勝負は一瞬だつた。月夜は玉野を一刀両断

僕は平賀を蜂の巣にした

ああ……言い忘れてた……僕さ……自分が指揮をする時は……通常の力に戻すんだよね
時は……通常の力に戻すんだよね

問題はロクラスに勝つてからだ…

雄一は平賀と話し合い設備は交換無し。
違う条件をした

まあ次のBクラスの為だからね

その後…陽哉や雄一、月夜達はみんなから称えられていた

姫路さんは運動神経が悪いから今回は後ろだった。まあ周りを一掃してたな

でだ、

「離れりおおおーー！」

「明久君ー！私頑張ったのー！」

美紀が抱きついてきた…女裝させない。僕のことアキちゃんと言

わない

つまり約束を守ってくれた訳だ…正直驚いたが…

「今はもっと酷い…」

胸を押し付けるなー・舌をひかづけるなああー・

「…でねー今度はさき合つてくださこー!」

「話しきをキケHHH!—//—/」

「こつ剥がしても剥がしてもくつづくー…?」

「ぬぐああー！」

顔を掴み必死に引き離そうと試みるが、

「明久君！明久君！明久君！明久君！ハア…ハア！／＼／＼

「…いい加減にしろおおおおー！」

結局…エンディング後は…バグ発生か

登場人物紹介（オリキャラ）（前書き）

鈴「やつたあーよつやく私達の紹介だね！」

明久「だからと言つて抱きつくなあああああ／＼＼＼！」

登場人物紹介（オリキャラ）

関原陽哉
せきはら ようや

身長175 / 体重57

クラス：Fクラス

性格：元気かつ優しい

趣味：ゲーム、スポーツ、撮影

好きなもの：ゲームやコーヒー牛乳

嫌いなもの：仲間を傷つける奴、言い訳をする奴、姫路や島田

- ・普段は優しく元気な少年。口のことが好きで明久とは似てる面があり特に仲が良い。いつも幼なじみの奇襲を受け苦労している

- ・得意な教科は数学や科学と言った理数系

Dクラス戦の際に明久が船越や布施を呼んだのも陽哉の為でもあった

召喚獣：ターミネーターに近い。肩にはレーザーガンがあり当たると点数関係なくその部分が溶ける

新野友里恵
しんのゆりえ

身長164 / 体重

クラス：Fクラス

性格：明るくクラスのムード約

趣味：陽哉への奇襲、ゲーム、絵を描くこと

好きなもの：ゲーム、陽哉、明久の料理などなど

嫌いなもの：FFF団、暴力する人

とにかく陽哉が大好きな格闘好き。親しい仲間には徒名を付けて呼ぶ。明久の料理が大好きで：今は明久から教わっているゲーム好きな為、明久や陽哉達と気が合う

召喚獣：女型ターミネーター 本人による希望
能力は陽哉と全く同じだが、姿は美しい
。得意な教科は陽哉と違い文系

月夜光奈

身長157 / 体重

クラス：Fクラス

性格：優しく穏やかで、周りを引きつける力がある

趣味：読書、妄想すること、

好きなもの：小説や妄想、明久

嫌いなもの：気持ち悪い人、虫、暴力する人

- ・見た目は日本人形並みに美しく可愛いがそんな外見から想像もつかないような妄想をする

妄想は危険なレベルばかりで明久の時に關しては手に負えない。しかし普段は一番真面目である。明久に攻略（ここ重要）されたが自分からふつている

召喚獣：大剣を装備したハンティング武装。様々な武器が隠されている為、相手に大きな動搖を与える

得意教科は文系で現国と古典はずば抜けている

赤咲鈴
あかさきすず

身長160／体重

クラス：Fクラス

性格：優しく小動物のようにきゅんとしている。とにかく明久を弱愛している

趣味：ゲーム、家事、明久のお世話

好きなもの：ゲーム、UNO、明久

嫌いなもの：暴力する人、騙す人、虫、雄一

- ・とてもプロポーションが良く天然。明久に一番最初に落とされた女性。

いつも元気で優しいが本当は苦労していて明久はそれを知っている
ので彼女がついてきても構わない

明久にふられているが諦めたかは不明である

それ以降はポニーテールから神のみぞ知るセカイの長瀬のような髪型にしている

召喚獣：全く本人と同じ姿で武器は双剣と大砲

得意教科は明久と同じ日本史や世界史である。総合科目においては姫路よりも高い

腕輪は『マグマ』を使用する

- ・これから登場するバカテスキヤラ達も一部変更点があります
- （例）玉野美紀ー明久と認めているが危険なレベルで弱愛している
など

七問目・弁当と仲良し女子と根本を弄つて遊ぼー

Dクラス戦が終わってから次の日の朝：

「…すひ」

吉井明久は眠っていた。昨日の玉野の一件で相当疲れたのだろう

玉野との格闘は夜まで続いた

自分の家へ連れて行こうとする玉野に明久は何度も殴り飛ばすのだがすぐに起き上がり再び乱戦になつた

その時明久はぼそりとこう呟いたのだった

「僕としたことがルートを間違えてしまうとはね」

普通の明久なら口にはしない…だがこの吉井明久は落とし神様のようにクールで優しいのだ

「…んん?」

明久は軽く寝返りをうつたのだが、体が上手く回らないことに疑問を覚えた

何かがいる

「……！」

明久は軽く目を覚まし思い切り掛け布団をはぐつた

何で彼女がいるんだ…

「は…？」

目の前には倒れたのか軽く涙目になりながら頭をさすっている鈴がいた
普通なじいには慌てるんだけど…あいつは僕にはそんなことができない

「何やつてんだ」

最初に出た言葉はそれだった。

何故「いつが僕の布団の上にいるんだ…

「おはよう明久君！」

「話しが逸らすなああー！」

ガシリと頭を挟みグリグリとする

「」やああー痛こよおおーー」

ワタワタと暴れるが容赦はしない…ボッキッと話しが聞けりゃないか

「待つてよ明久君～！」

「……」

不法侵入した奴の言うことなど聞いてられるか
僕はこの『クライマックスビーズフォー』に夢中だ

使用キャラはオーブしか使ってないけど…

「ベリーバーパロードネンスドロップはいつ見ても最高だ！」

空を見て叫んだ。周りの田なんか気にしない！

今日も青空が満点だー！いつの日はゲームに限るー！はははー！

「明久君が……壊れてる」

鈴は遠い目をしているが…まあ気にしない。というか僕は壊れてないけど

「鈴は何でゲームをやらなーのさ」

鈴もゲームが好きだ…なら普通はプレイするのが当たり前だろ！

「い、いや…明久君が異常なだけだから」

「は？」

異常？何が異常だ…！僕はただ決められた時間に決められたことをしているだけで…う、ああ…おのれバースタッゲめ！目を離した隙に…

「上等だ！－ゲーマーの力を見せてやる－」

4DSを失つて…悲しみに明け暮れていた僕だったが…PNPがあつたことを忘れていたよ…ふつ…ははは！

「私先行く…ね」

鈴は何故か顔を引きつらせながら走つて行つた。何だよあいつ…

さてさて…ここはアクラスの教室…まあ朝から五月蠅い…

そして

「明ひ…ふべ！」

面倒くさい…美紀が突然現れ飛びかかってきたから…あくまでも戦闘防衛として返り討ちにした

「…痛たた」

格好が格好だからスカートがはだけて下着が見えているが…熱烈大歓迎だ…

「……ブシャアアア！」

ちつ！ムツツリーーは荷が重かつたか…

「ちょっと… 明久君… 女の子を殴つたら駄目だよ？」

「…不法侵」「わああああああああああああああ」

あくまでも戦闘防衛しようとしたら鈴は大声を上げた。ぐう耳があ
あ！

「頭がああ！」

隣では転げ回るみんな…陽哉や雄一もいた

あ、
美波達も居たのか

「とにかく邪魔するな美紀！僕は今から勉強をするんだ！！」

「…ええ」

そんな顔されたって駄目なもんは駄目……月夜？帰つてこい！妄想世界へ行くなあああ！

「おはよひざひこます……みんなびじつたんですかー!？」

姫路さん教室に入つてくるなり悲鳴を上げた…まあこの○○○状態じゃ無理ないか

「おはよーーーあつアツキーーー！」

続いて入ってきた友里恵は僕を見つめるなりトタトタと近寄つてきた…ああ、あれか

「昨日教えて貰つた」ことを生かして作つてみたんだよ?」

相づちを打ちながらヒョイとプロッケを口に含む

「ふむ…なかなかクリーミーだ…いい味出してるよ」

「やつたあ!」

ガツツポーズを取る友里恵…陽哉君は幸せ者だな…たぶん

「あ、明久君!…実は私もお弁当作つてきたんですよ!」

「姫路さん。これは軽食だけど?」

お弁当って……そんなもの食わされたら確実に殺されるっての

「良かつたら……食べてく」断る「え？」

「いいか！あくまでも僕が友里恵のコロッケを食べたのは陽哉の為だ！！友里恵は今、僕の元で修行中であつて……更には自分に関係しないなら別に構わない！だが僕は女性の弁当は食べない主義だ！！」

ビシリと指を指して言い放つ。つまり友里恵はあくまでも陽哉の為。姫路さんは僕の為……だから僕は断る訳だ

「……や、そうですか

「アキ！酷いじゃない！瑞希が折角作ってきたのに

そんな言葉を無視しつつガラリとドアを開ける

「鈴……行くぞ」

「あつ！待つてよ明久君！」

七問目・弁当と仲良し女子と模本を弄つて遊ぼー？

教室から出て僕は鈴を連れてBクラスに向かっていた…まあ簡単に言えば宣戦布告の為だ

今頃みんなは回復試験を受けてるだろ？…さてBクラスの肩代表に会わないとね

「なんで私まで一緒に？」

「決まってるよ」

ガシッと肩を掴み彼女に詰め寄る

「ふえ！？」

優しい目をしながら彼女をじっと見つめる…やつ必要なんだ君が

「だつて殴つてきた時対応できないだろ？」

「…………え……」

「じゃなきゃお前をつこに行かせる訳ないだろ?」

鈴はかなり複雑な顔をしながら後ろを向いた。そしてことりと

「あやつー。」

逃げる前にガシッと後ろ襟を掴み引っ張る。全く逃げようだなんて
いい根性してる

「行ってくれるよね?」

「…………むー」

力なく頷く鈴…まあ後から何か奢つてあげよう

「本当にいくの？」

「今更何を言うんだ。当たり前じゃないか」

「で、でも…」この代表根本君だよ？」

根本…モテない奴、卑怯な奴、関わりたくない奴ワースト一位…ゲームでは一番損な奴だ。だからこそだ

「ああわかってるよ。」

だからあいつをいたぶつてやるんだよーー！

「明久君？怖いよ？」

「…鈴。危なくなったらこれを使うんだ」

そう言つてから鈴にクラッカーを渡す

「え…？」

「特製クラッカーだ。使えば一口相手の耳を潰すことができる…まあ兵器だな」

「なつーー？」

ふ…相手が根本なら「ちりもせ」「へや」せて貰うよ。まあ点数は減らせないがそこは雄一が上手くやるだろ？

「…「ひ…ええ」…」つなつたら意地だあ

そう言つてから鈴は教室へ突撃していった

いいぞ作戦通りだ

「さて、僕は…」「あれ？君ってFクラスの吉井君？」な…

田の前には薄い紫で長い髪をした子と薄い緑色で短髪の子が二つちを覗き込んでいた

まさか…この二人…Bクラスの…

「……やうだけじ句だ？」

落ち着け……冷静にしろ……『宣戦布告をしそむーー』 駄田だああー。

「えーー？ 宣戦布告？」

「あーーー やうだけじ句井類ーーふべーー。」

突出に長こ髪の子の口を押された……何故かそつしなきやつて思つた
んだ

「あんたー律子に向して『宣戦布告だとーーふぞれ土ぬなーー』」

や
せ
こ
ば
ー

「 「 も や もーー」」

一人をすぐ「耳を塞ぐように押し倒した

『パアアアアアン！』

クラッカーの超強烈な音が響き渡り…

「ぐ…！」

「、鼓膜が！」

『あやああー。』

『いてええー。』

ぐ……何も聞こえない……何が起きてるんだ！

「明久君——帰らひつー。」

「鈴つべえー。」

ガシリと掴まれ、引きずりられるように僕は教室から離れて行つた

「何？ 今の

「わからぬいけど……何か凄い音が

『ああああああー。』

『誰だあー。あんなクラッカー鳴らしたのはああー。』

「「クラッカー？」」

『ぐ…ふい』

(律子ー根本君の足元にあるのって…)

(うん。クラッカーだよね?もしかしてみんなこれに…)

(じやあ…吉井君が押し倒してきたのは…)

(私達を守る為?)

((……))

((~＼＼＼＼))

根本 side

くわー！Fクラスの野郎…宣戦布告だと？

それにして何だあの馬鹿でかい畜生…おかげで耳がいかれてしまつたぞ！

『根本…』

何だ？何でこいつらは俺の周りを取り囲んでるんだ

ん？クラッカー？

！？

「なんだこれ！俺か！？俺がお前らが生意気だから使ったのか？」

くそーこんなもん持つてた記憶ねえ…

「「根本おおおー。」

何を言つているのかわからぬまま俺はクラスの奴らから揉みくちゃにされてしまった

さては…吉井の野郎か…!!

必ず復讐して…ぐふあー

七問目・弁当と仲良し少女と根本を弄つて遊ぼ　?（前書き）

吉井明久のみんなに質問コーナー！

明久『よい子のみんな吉井明久の質問コーナーへよつこいそ～。ここでは僕がこの小説のみんなにむちやぶりな質問をしていくコーナーだよ～』
よーし早速こつてみよう！

今日はこの人！』

雄二「…」

やあ雄二。質問コーナーへようこそ

「明久！？てめーの仕業か！？後で覚えてやがれ！！」

では質問いくよ～

「うう」

Q 霧島さんにお詫びしたい？

「明久でめえええーー！」

したい？

「ふざけんな！誰が

「…雄一」しちゃ翔子！？」

「…浮気は許さない」

「落ち着けー俺は う、あああああ ー」

今日は霧島さんにお仕置きをしてもらいましたー

次回は誰でしょーーお楽しみに～

七問目・弁当と仲良し少女と根本を弄つて遊ぼ　?

「く…耳が」

とんだミスだ…まさか僕まで聞こえなくなるなんて…。何故彼女達を助けたんだよ…あー何も聞こえない

「明久君大丈夫?」

何か言つてうるづるした目で覗いてくるのは…鈴だ。赤い瞳から今にも溢れそうだな。といつも本当に聞こえないなあ…でも言いたいことはわかる

「…ふん。まあいいわ 根本は潰せたんだからね」

あいつのことだ。さつと仕返しにくるつもりだらうが…あいにくそうはいかない

「明久君大丈夫ですか?」

「…？姫路さん」

「宣戦布告に行つたと聞いたので…。あ…さつきは怒らせちゃつてごめんなさい」

何を言つてゐのかさつぱりわからないけど深刻な顔をしている…

「そんな顔しなくても大丈夫だよ。それより雄一は…」

「坂本ならあつちよ?」

「…雄一は何処だ?」

「だから坂本ならあつち」

「…雄「いい加減にしなさい！」ぐふうあー」

な、何だ！？痛たたたたた！腕があああ！美波かー？ぐふう

「島田ストップだ！」

陽哉がすぐ近くに美波を取り押さえる…何でいきなり間接技を

「明久どひしたのじや？」

秀吉がこいつを覗きながら見つめてくる…あなるほど

「大丈夫だよ秀吉。ギリギリ折れてないから

「？」

あれ？何で余計に深刻な顔に

「明久さんどうしたんですか？」

「光奈…」

黒く長い髪を靡かせながら光奈が近寄ってきた…

「……疲れたような顔してる」

「ムツツリーー…？」

「まさかだと思うがお前聞いたてるか？」

「？」

うんん！？何でみんな近寄ってきてんの！？そんなことよつ雄ー？…

「とりやあー！」

「「つおああつー！」

背中に何か柔らかい物が……！ 友里恵ー？ 何を…

『『吉井…万死に値するな貴様は』』

「黙つてろ！」

『『』』

「うわあ！ 抱きつくな！ 僕に抱きつくなー！」

友里恵はそんなことも聞かず耳を掴んできた…「うつ

「あ！ やつぱりだ！！ 鼓膜が破れてる…」

「凄い視力だな」

「みんな何言つてるんだよー！」

「「めんごめんアツキーー！」

友里恵はスルリと降りてすぐに何か取り出す…紙？ ペン？

(アツキー。アツキーの鼓膜破れてるよね?)

サラサラと友里恵は書いて僕に見せる…！ さっきの行動は僕の状態確認だったのか…

「ああ。何も聞こえないよ

(何があつたんだ…)

「…Bクラスの宣戦布告に行つた時…事故つたんだよ」

(…まさかお主のクラッカーか!?)

「うん…」

(…本人が事故るなんてまずおかしい)

「流石ムツツリーー…。実は近くに女子がい（明久君お話ししましょ
うね?）（覚悟できるんでしょうね?）」

邪悪な殺氣!?というかなんで僕が女子と関わるだけで…僕だって
関わりたくないんだよ!

((吉井君~))

「黙つてろF」

陽哉がクラスメイトを睨みつけている…はあ…あの連中は

「とりあえず僕は雄一と試験召喚戦争の話しがしたいんだけど」

（わかりました明久さん。私から言つておきますね）

「うん。ありがとう光奈」

(/ / ~)

ん?何だあの文字?

いや……そんなことよつ…!

((……))

あの一人を何とかしないと殺され…る

(ねーねー明久君明久君)

「何だ！…今は話している時じや…」

(明久君つて…好きな娘いるの？)

「鈴…君は何を（明久君！好きな娘いるんですか！？）

（正直に言いなさい！）

（できれば私も知りたいです…（そしたら妄想が膨らむ））

「何だ！？痛たたたたたたたたた！腕碎けるから！美波！歩けなくなるからああ！」

（…間接技…）

「光奈ああ！お前は妄想するなああ！」

畜生！鈴の奴！後で覚えてるわおおおおおおおおおおおおおおお

『バキイ！』
『ボキイ！』

「にぎやああああああああああああああああああああああ…」

八問目・誤算と仲良し少女との名は高木恋奈

「ゴキン！」「ゴキン！」

「ふう……」

間接を戻してとりあえず一段落だ……全くあの二人を何を目的に暴行を加えるのか知りたいよ

「それにしても……」

顎に手を当てながらじつと考へる……何を考へているかは……まあBクラスのこともあるけど……一人のことだ

「菊入と岩下だっけか……どうしたもんか」

Bクラスの指示を断つのが目的であつたんだが……一人だけ平氣となると……いや雄一に話してあるから大丈夫なんだが

「何故僕は彼女達を……」

これだけは考へても浮かばない……全く僕らしくないな

「はあ……まあいいか。今回僕は勝手にやらせてもらひうとうやつ

つまりは菊入と岩下を潰す……そして根本を叩きつぶしてやる

『…ああ…みんな行つて来い!! 狙うはシステムデスクだ!』

『『サーヴィエッサアア!』』

チャイムの音…雄一の指示…そしてみんなが一斉にBクラスへと駆け出して行つた

始まつたか。今日は数学を主力…つまり

『サモン!』

『『うわああーー』』

陽哉が無双になる時だ……陽哉は理数系を得意としていて……特に数学は高成績

補給試験があつたから点は更に上がっている……光奈、鈴、友里恵にはサポーターとして戦つてもらう。まあ美波や姫路さんがいるから問題ないだろう

「さて……長谷川をどこまで進められるかだな」

雄一は教室で考えながら外を見ていた。僕や秀吉、ムツツリーーーは待機中だ
まあ僕は勝手に行くけど

『よし！道が開けた！みんな行くぞ！』

『『オオオオーー』』

陽哉が上手くやつてくれたらしい……外を見ればすぐわかる。みんなが一気に押し寄せて行く

けど問題はここからだ

おそらく今はいい状態だけど…あつちには竹内がいるはずだ。陽哉を潰しにいくには竹内を連れてくればいいのだから早めに陣形が崩されるのは間違いない

「そろそろか」

僕はしばらく考えた後…教室を開けようとした

が、先に扉が開かれそこには…あの一人がいた

「…なつ！？」

馬鹿な…あの状態からどうやってくぐり抜けてきたんだよ！

く…まずいな。雄一は代表…打ち抜かれたFクラスは負けだ

『吉井明久君ね？』

「あ、ああ。そうだけど」

吉井さんは紙を取り出しへんで書いていく。そつかこの一人は僕の状態を知つて

『……廊下に出でくれない?』

廊下に出る? 雄一が田代じやないのか?

雄一達は首を捻りながら机を見ていた。一体どうしたんだ

『話しがあるんだけど……こいかな?』

話しがあるんだけど……とつあえずもしもに備えて……

「わかったよ。」

そう言ってからドアを開き一人と一緒に出て行った

『じつこいつだ?』
『ど見ても明久に用があつたらしいの……』
『……秘密の話し』

『何はともあれ助かつたな… よしムツ シローー、秀吉。例のことをするぞ』

陽哉 side

「サモン！」

関原陽哉 Fクラス

数学 320

俺は召喚獣を操作しながら周りの奴らを蹴散らしていく… よしいい調子だ

『竹内先生を連れて來たぞ…』

「何！？」

くつマジカラ。俺の出番もう終わりなんて…

「陽哉君！ 私に任せ…！」

「私もやるぞー！」

鈴と光奈は俺達の前に立ち並ぶよつて召喚獣を召喚した

『『サモン！』』

光奈、鈴 Fクラス

現国 280、240

『馬鹿な！？』

『なんだあの点…』

『なんだあの点…』

ん？同じことを言つ奴が…………ああ。明久のクラッカーか

「「いくよー」」

二人は威勢よく飛び出し辺りの生徒を倒していく

「私も行きます！サモン！」

ここで我らの姫路が登場して大勢は逆転し俺達が有利になった

姫路瑞希 Fクラス
現国 320

「よし！みんな姫路さん達に続け！」

ん？またBクラスの……げえ！？Bクラスに向かつた奴ら教室側でやられてる！！

やべ……でもあれは古典か……くつ

『うわああ！…』

『戦死者は補習…』

「く…すまないみんな…」

落ち込んでいるのもつかの間…有利だった姫路達が追い込まれ始めた…つてまじか！？

「この人…強い！」

「あつー！」

そこには長い銀髪に赤目の子が姫路達に攻撃をしていた

「……誰だお前？」

銀髪の子はくるつと振り返つてにじりと笑つた……

「私は……たかぎれんな高木恋奈です。よろしくね」

「あ、ああ」
そう言つている間に……高木は三人を倒した……

高木恋奈 Aクラス

現国

650

「……な……んでAクラスが！？」

驚異的な点数とBクラスではない彼女に俺は呆然とするしかなかつた……

『じゃあ……悪氣は無いけど君も補習室に行つてね?』

その言葉でハツと我に返つた…危ない危ない…危うくやられるとひだつた

「そつはいくかよ！何故なり』《船越先生、船越先生。至急体育館裏までお越し下さい》『」

この声は須川か！…ようやくか雄一の奴…

『《吉井明久君が体育館裏で待っています。なんでも生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》』

うわ…明久ドンマイ…としか言えない…船越なら絶対来るよな…

「…………ふうん」

ん？ちよつ…なんか高木から変なオーラが…死に神…？あれ死に神いい…？

「ねえ関原君」

「は、はい！」

その声はあまりにも冷たく俺は額から汗を流した…やっぱ体が

「…アレハダレガハンニンカナ？」

「か、片言…。えつと放送は須川と言つ奴で主犯は代表の坂本雄一」

「…サカモトユウジですかあ」

「いつー？オーラが黒から赤に…血だ…あれは間違いなく血だ！」

「では…ちやつちやと片付けちゃおうかな…」「や、そういうか！俺がいるから…」「は通れないぜ！サモン…」

この点ならAクラスと言えども簡単には超えられない…雄一を打ち取らせるわけにはいかないんだよ

「凄ですね…300オーバーなんだ…。でもね

高木は一瞬溜めてから召喚した…。姿は鎧が装備され赤いミニースカートに双剣だ…

「怒った私を止めるのは不可ですよ?」

「マジカ!!...」

俺は圧倒的差で敗北をきした

「明久！今助けに行きますからねーー！」

高木はバビューンと高速で走り去つて行つた

雄二死ぬなよ？

八問目・誤算と仲良し少女とその名は高木恋奈

この文月学園に新しい転入生がやつて來た…彼女は成績が優秀で天才と呼ばれている

そして彼女は今回…指輪の為に学園長の許可を得て試験召喚戦争へと参加した

本来の目的は吉井明久の戦力分析と彼女の実力をしる為のBF生徒討伐…

なのだが

明久 side

「何の用かな?」

『…えつ…と』

『あれよ!…あれ!』

二人の言葉に疑問を抱く。岩下は真っ赤になり菊入は必死になつていた

「理由が無いなら…補習室に行つてもうつけど?」

「…」

僕だつて暇じゃない……だから一人と話している暇は無いんだけど

『ああもうー何やつてるのよ私達ー!』

『所詮觀察処分者よ…私達はそんな屑と仲良くする気はないわ!』

「言いたいのはそれだけか」

一人はハツとなり僕を見るが…どうやら美波同様罵倒したいだけの
ようだつたな

『違うの吉井君!』

『そうよー!けしてあなたが馬鹿だからじゃなくて…』

「試験召喚」
サモソン

キーワードと共に姿を現す召喚獣…赤い制服に二丁銃だ

吉井明久 Fクラス

数学 150

『あ!』

『なんでこうなるの!』

「戦闘開始…」

一人を冷たい目で見ながらカチャリと構える…

「ほら早く召喚しなおや 君達を撃つよ~。」

「！」

「…律子！あんな奴やつつけるわよ。」

「…え、ええ」

「「サモンー」」

岩下律子 Bクラス

数学 240

菊入美由美 Bクラス数学 265

ふーん。流石はBクラスか… Dとは大違ひだな…

「律子！」

「真由美！」

「「行くわよーーー」」

息ぴったりだな… ならちょうどいいや。こいつの力を使ってみるか

… でもまずは

「相手してあげるよ」

銃を構え素早く走り出す……頭上からハンマーが振り下ろされ上手く避けた

「えい！」
「ほつ！」

もう一人もハンマーを振り下ろすが避けて脇腹に銃を突きつける

『バアーン！』

銃を打ち込み菊入の召喚獣を吹き飛ばした。……やつぱり点数は少し減らないか

「たあ！」

「遅い！」

ハンマーを掴み腹に銃を乱射する……岩下の召喚は叫びながら吹き飛んだ

「強い……」
「そんな……」

点数は岩下が231で菊入が232か……中々強いな……

「じゃあ使ってみるかな……」

僕は赤い腕輪がついている方を前に突き出す

キーワードは…

『パワー・アップ』

腕輪が光りだし僕の召喚獣を包み込む…たちまち召喚獣が赤いオーラをまとい点数も飛躍的に上がっていく

僕の腕輪はハンドレット…全ての力を百倍にするんだ。勿論制限時間があり…その時間は約30秒…

吉井明久 Fクラス

数学 15000

だが…使えばほぼ最強…教師など赤ん坊…生徒はそれ以下だ

「え…? 何よあれ!」

「10000オーバー…」

「じゃあね…」

そう言つて召喚獣は銃弾を放つた…その動作はほぼ見えず…また

菊入真由美Bクラス

数学 0

&

岩下律子 Bクラス

数学 0

…そして打たれかすら全くわからない…。まさに神…

「そ、そんな」

「……こんなことつて」

二人はガクリとうなだれるがそんなの知らない…。彼女達は僕に挑発をしたんだ。ならこのくらい当たり前だろ？

『戦死者は補習…』

「いやああ！」

鉄人に連れて行かれながら彼女達は悔しそうに叫んでいた。…。彼女達はこれから地獄が待ってるだろう

「ぐふはあ！」

体中に重い疲れと全身が痛む…これがハンドレットの発動条件だ…かなり体力が消費する為あまり使いたくないんだ…ファードバックが3とするとこれは12つて所だ

「ぜえ…。よし…後は根本を…」

体がきついな……やっぱり腕輪は使う時を考えないと……くそつ……しばらくな休憩しなきゃ走れないな

「ふう……とりあえず雄……《船越先生、船越先生。至急体育館裏までお越し下さい》は？」

須川？ 何だこの放送は…

《吉井明久君が体育館裏で待っています。なんでも生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

その放送に僕はピキリと固まつた……いや あのぞ…

「須川ああああ…」

野郎！ 何を言つてるんだ！ ……まさか雄二の差し金か？ なら一入まとめて地獄行きだ！ くそ！ 早く逃げなきゃ船越が来る…！

「ぜえ… ぜえ…

あーーーこんな時に… 最悪だ… 僕はこんな所で人生を終えるのか…

…

田をつぶつてじっとしながら溜め息をつく。もつ黙田だと思つた時

ダツダツダーーー！

凄い勢いで誰かが走ってきた。ああ船越がもう来たのか…

「あきひさー！」

違つ…船越じゃない！

「…まさかこの声は…」

そうだとしたら有り得ない！だって彼女はここには居ないはずだ…

ダッダッダー！バツ！

そちらを静かに振り向くと案の定…有り得ないはずの少女が走ってきたではないか。そして盛大にジャンプをして…

「明久！」

「…つと」

グシャー！ズザザザ！

「あう…」

「……はあ

ひょいとかわすと盛大に壁にぶつかり、ズルズルと倒れしていく…こいつ昔と全然変わらないな

「痛たた…」

そして…スカートがはだけて下着が見える…一鼻が熱いんだけど…

バツ…!

彼女は素早く起き上がりて…僕の顔にのしかかつてきた…

「…？／／／／」

そこには男の夢とロマンがあふれるものが顔に当たっている…つまり…彼女の下着の下敷きになつたということだ

「ふぐ…!!」

！…畜生…固定されてる…布が顔にこすれるつづ…／＼

「明久！久しぶり！どうかな？久しぶりの感触は…」
「…ふざけるなあ！早くどいてくれ！」

「え？お尻が良かつたの？」

「馬鹿かあああ！？／＼」

僕は勢い良く起き上がり彼女を跳ね飛ばした

「…もう。明久は相変わらず乱暴だなあ？」
「違うからね！？君のせいだから！」「

「でも…気持ちよかつたんでしょう？」

「ふざけるなあ！そんな訳……あるわ」

「明久は欲望に忠実だね…」

にこに」としているこの銀髪に赤い瞳の少女は高木恋奈…小中の仲であり…いわば幼なじみ関係だ
彼女は中2に外国へ転校したはず…なのになんで…

「…とにかく邪魔しないでくれ恋奈。僕は今からキノコを討伐しなきやならないし船越から逃げなきやならない」

「…あ。船越先生ならさつき…」

「え？」

まさか…」」」としてわからないが船越を…殺ったのか！？

「そうだ！明久。坂本君知らない？」

「坂本？ああ屑雄一か。あいつなら教室に居るよ」

「そつか。ありがとう明久」

「…抱きつくな…！」

「？でも明久…」」」の好きだったよね？」

「…前まではね」

「…じゃあ私の胸の大きさは？」

「…立派なF」

「ふえ…」」」なんでわかつたの？じゃ…じゃあ私の下着の色は？」

「ライトピンク」

「…」」」いつ見たの？」

「お前が見せたんだろうがあ…」」」（・。・。）」

「えへへ／＼バレちゃつた…」

「バレちゃつたじやない。バレバレだよ…」

「…折角明久の為に我慢して頑張ったのに…」

「ん？ 何か言った？」

「ううん…そ、それより私も根本君を討伐していいかな？」

「あれ？ 雄一に用があるんじゃないの？」

「い、今は明久と居たいの！／＼

「ふーん。そりゃどうも」

「 明久の鈍感」

あれ？ 何で恋奈の声が聞こえるんだ？

八問目・誤算と仲良し少女との名は高木恋奈

「…………」「…………

冷や汗が流れる…今の状況を遅れて理解する

「くす…可愛い」

僕は…根本を奇襲する為に一階へ行つたのだが…突然壁に叩きつけられ何かを突きつけられた

デザイナンナイフだ

デザイナンナイフはとても切れやすくて前に使用した時…少しかすつただけで血が流れなかなか止まらなかつた
そんなことよりも今怖いのは彼女…幼なじみの恋奈だ…とても暗い目でこちらを真っ直ぐに見ている

「どうして? セッキまで君は」「うん。あなたが性格が変わったから殺したくなつたの」

笑顔で告げる彼女は恐ろしく…僕は足が震えていた…何故性格が変わつただけで殺すんだよ

「…恨みでもあるのか?」「…ないわ。ただ…」「ただ…?」「しゃべらないで…」

理不尽にもほどがある…一けど首に突きつけられたデザイナンナイフは冗談ではない

「私…好きな人がいたの」「…………」

「その人は馬鹿で優しくて勇敢だった。でもその人には何かが足りなかつたの」

恋奈は冷たい言葉で僕に言い放つ。背筋が凍りそうだ。
「その人は、鈍感だったの……恐ろしいくらい」

「…………」

デザインナイフがゆっくりと首から外されていく。でも恐怖はまとわりついたままだ

「ね、明久君。明久君の腕輪って確かに体力と精神を削ってしまうんだよね？」

「ああ。そうだけど……」

おかげでクタクタだ。あと一回が限界だ。といつよりなんで知ってるんだ

「そり……」

『ビシュッ』

「がー！があ！」

鋭い痛みに思わず「ずくまつ」としまった…痛い…田下から血がドクドクと流れている

「やっぱり鈍くなるんだね」

「お前！わざとやったのか！」

「…試しただけよ」

「…………うー」

反論しようと試みるが彼女が「デザインナイフをひらつかせ恐怖を覚えさせる…今だに痛む場所を押さえながら睨みつける

「…そうだよね…明久はこれが好きだもんね」

『ビシコツービシコツー』

「…ぐうああーあ…ああー」
頬…鼻の当たりが鋭く痛み血がドクドクと流れ始める…痛い…
「…ふふ。そんな態度だから明久君はモテないのよ」
「…余計なお世話だ」
「…あら？今度は目を切るよ？」
「ひっ！」

思わず怯えながら横へと逃げる…恋奈はただ笑つていてるだけで…僕はチャンスとばかりに…いや逃げるよつに廊下を走つて行った
「…ふうん。やっぱりFクラスね」

「はあ！はあ！くそ！」

歯をギリギリと食いしばりながら必死に保健室へと走つていった

雄 side

「くそ！なんで…他のみんなは…」

無駄だ根本。味方なんて既にいない…明久を生贊にしたから…俺達（陽哉がほんとんど）は無双状態になつたんだ。島田は姫路が助けたし…

そんな悔しい顔されたつて笑うことしかできないな

「……くそお！」

根本はやけになつたのか召喚獣を召喚しようとする…が…

「させません！月夜光奈が根本さんに現代文で勝負します！試験召喚！」

根本の敗北は決まつていた

月夜光奈 Fクラス

現代文 325

VS

根本恭一 Bクラス
現代文 231

「Iの勝負…俺達の勝ちだ」

月夜の召喚獣が根本の召喚獣の首を切り…勝負が決まったのだった

『久しぶりの再会どうだった?』
『駄目駄目。明久君…振り向いてくれないもん』
『馬鹿な所だけが取り得だつたのにね』
『…那杜撰。なすたあなたも酷い人ね。明久君を振つちゃうなんて』
『…所詮…観察処分者だからね』
『…そう。』
『恋奈…あなたはどうなの?』
『…後悔してるわ…なんで殺すなんて言ったのかわからないわ』
『…あなたも…所詮…同じね』

九問目・傷と△クラスとそれはまさに運命だった…

「……離せ！！」

「おとなしくしろ根本！」

「次はゴスロリに着替えてもらひからなー！」

「なつー聞いてないぞ！」

そんな騒がしく気持ち悪い光景が見えた…

「痛つ！痛い痛い痛い！」

「我慢よ吉井君。全くどうやつたらこんな傷がつくれるのかしら」

「…あぐあ！」

涙目になりながらも僕は保健の…新田京子…年齢24歳で茶髪のセミロングの先生に手当をしてもらっていた
どうやらBクラス戦は終わったようで根本の悲鳴声が物凄い聞こえるんだけど

「デザイン…ナイフで切られたんですよ」

「えー？デザインナイフって…一体誰に」

その質問には言葉が詰まる…何というか…あいつだって言つべきなんだろうけど口に出せない

「…クラスメイトに…」

「クラスメイト…つて…それはまだどうして？」

しばらく…考えた後に新田先生をじっと見つめた。当然笑顔で

「…………嫉妬ですかね？」

「雄一……」

教室の扉をガラリと開けた先には悪友がじっと立っていた

「おう明久……生きてたのか」

「……生きてたじゃない。お陰様でこっちは危なかつたんだよ?」

「……なにお前だから別に氣にはしないだろ?」

「酷……」

「雄一は軽く睨みつけてから卓袱台へと近づいた……まあ荷物があるしね。もう帰宅したい気分だ

「ん? 明久……船越に殴られたのか?」

「……は?」

「馬鹿かお前は……その傷はどうしたのかと聞いてんだよ」

雄一が言いたいのはたぶんこの顔のことだろ? ガーゼを田下、頬、鼻に貼つてるんだ。確かに気になるだろうね

「ああ……これはAクラスにやられたんだ」「何? Aクラス……陽哉もそんなことを言つてたな」

「……どうしたこと」

雄一はいつもとは違ひ真剣な眼差しでじつちを見てくる。なるほど……ただ?」とじやないな

「陽哉が戦争最中にAクラスの生徒に戦死させられた」

「まてよ……それって反則だろ?」

「ああ……普通は他のクラスが戦争最中のクラスに攻撃するのは駄目だ」

「つまり……ババアの仕業つてことだね」

「ああ……恐らく陽哉とお前を襲つたのは同一人物だ」

「…………」

静かに鞄を持ち教室の扉を開く。一体何を考えてるんだあのババア

「明久……気をつけて帰れよ」

教室を出る前に雄一の静かな言葉が響いた

『P N P』

画面に種類の文字が映し出されすぐにメインゲームへと変わる。いつもと同じように帰りはゲームをする

(……Aクラスは何を考えているんだ)

『なすせ..「明久君! 私あなたに伝えたいことがあるの」』

(…何故..恋奈は邪魔をしたんだ? 何か理由があつてやるはずだ..
ババア絡みなら何かの開発だらうけど…)

『なすせ..「私ね..明久君のことが」』

(.....鈍感..女性.....まさかー?)

ゲームを進めずに周りを見渡す..もしそうなら恋奈に何があつたんだ..彼女は人に手を出す人間じゃないのはよく知ってる

「.....Aクラスの中に..僕らへ何か恨みをもつた連中がいるのか」

ゆつくりとボタンを押す..すると画面が切り替わる

『なすせ..「あなたのことが好き」』

「...? そうか..ようやく繋がったぞ」

やつてくれるな..あいつ。まさか人の幼なじみにまで手を出すなんて..そこまで僕は君達には低評価なんだ..ね

『明久君..ゲームなんかしてどうしたの?』

「これが僕の日課だ。おかしいんだろ？好きなだけ笑えよ…恋奈」
ギロリと後ろを振り向くと彼女は「コーコーしながら立っていた…つきまとわれてた訳か！」

「笑わないよ別に」

「じゃあ殺す気か？」

風が静かに吹き渡り彼女は相変わらず表情を崩さなかつた…

「そうだとしたら？」

「返り討ちにするさ」

「あら？でも明久君わざと逃げたじゃない」

「見くびるな。普段の状態に戻れば訳ないさ」

「…そう」

互いに睨み合つたまま動かずいた…

「恋奈…一つ尋ねたい」

「何かしら？」

「君は…僕が好きか？」

再び周りが沈黙状態になる…恋奈はくすりと笑つてから口を開いた

「ええ。昔はね…でも今は友人として好き」

「…そうか」

やつぱり彼女は僕を異性として好きではなかつたようだ…

「今の明久君は冷たいから…何を言つても」

「…それが今の僕なんだよ恋奈」

そんな僕を好きになってくれる奴なんて本当に少ないだろ？…鈴とか

「へえ…同情の余地はいらないね」

「ああされたくもないさ」

もつ君とは分かり合えないな…悲しいよ。幼なじみだったのに…今
じゃ赤の他人みたいだ

「明日……決着をつけよう」

「ええ…ちょうどいいかもね」

それだけ言つて恋奈は去つて行つた…その時テザインナイフは握れ
ていなかつた

十問目・ナンパと 摺れた心

「ふう…今日はやけに重いな」

『スーパー文月』から出て数分…僕は両手に持つている食材が入っているレジ袋を見た

いつもなら訳ないのに今日に限って重たく感じる…

「鈴の奴…まさか部屋が隣だつたとは」

鈴は光奈、陽哉、友里恵達と一緒に僕が住んでる家族マンションの隣の部屋にいる

だから朝…僕の部屋に侵入できたんだ。どうやって入ったかはわからぬけど

「まあ今日はみんなが来て遊ぶからこんなに沢山買つたんだけど…」

合鍵はもしもの為に陽哉に渡してあるんだが…まあ大丈夫か

「…早く帰つた方がいいよな」

歩く足を早めながら夕日に照らされた道を歩くのだった

「…………しまつた！」

周りを見渡せば真っ暗だ。灯りがあちこちに点いていた。夜のは変わりない。

「僕としたことが……『デハブンバニア』に夢中になってしまったよ。」

いつもあることなんだが、夜までなんて今までなかつた……このゲームが面白いせいなのか……それとも

「違う何かがあるのか……どうひじろ陽哉達を待たせるから早く帰らねば」

『…………なあなあ姉ちゃん。俺達と遊ぼうよ』

『い、いえ……遠慮しておきます』

『そんなこと言わずにさあ……』

『い、困ります…』

『ヒューーー可愛いいね』

しばらく走っていたら近道に使っていた路地裏から、何かが聞こえた

「……ナンパか。全くいい年したおやじどもがみつともないな
僕には関係ないことだ……こんな時間に歩いている奴が悪いしね

『あつ！助けてください…』

『……』

女の人は歩いていた人に助けを求めるが当然無視。まあ当たり前だ
…誰だって関わりたくないしな

「おつと！早く帰らなきゃ」

ゲームをしまってからナンパが起きている方へ歩く。助ける訳じゃ
ない…あそこを通らなきゃ帰れないからだ

「…………助けてください！」

「嫌だ」

「え……？」

彼女の前を通りて行く…学生だ…しかも文月学園じゃない

『諦めな姉ちゃん！』

『結局誰も助けてくれないんだよ…』

(その通りだ。現実そう甘くないんだよ。怨みたいなら好きなだけ
怨めばばいいや)

荷物を持ち直しズンズンと通り過ぎて行く…この路地裏を抜けたら
マンションがある道につく…

助けてください…私…また男の人に犯されたくない！

『無駄だつて言つてるだろ姉…ぐふう…』

『『なつ…?』』

『え…?』

中年おやじを殴り飛ばした後軽く溜め息が出た…結局こうなるんだよな

「てめえ!? さつきのガキ!」

「何のマネだ!」

相手はざつと六人くらいか…

「あ、あの「これ持つてて」え…」

彼女に荷物を預けた後に軽く手をグルグルと回す

「みつともないよ? モテないおじさん 」

「殺せ! …」のガキを生きて帰すなあ!』

一斉に飛び交つてくるおやじ達…一人を狙つておやじ達の攻撃覚悟で鳩尾を狙つた

「ぐふあ…」

「がつ!」

一人目のおやじは田を白くしながら後ろへとふきとんだ。そして僕は顔に一発貰う

「あつーーー！」

彼女…少女が驚くのも気にせず殴ったおやじの頭を掴む

「う…ぐ…ぬおつやあー！」

「じふつー！」

頭突きを喰らつたおやじはふりふらとなりながら倒れた

「おつやあー！」

「…が…ー！」

横からおやじのストレートが炸裂し、口から赤い液体が出る…上

等だ！

「しゃああー！」

「しゃふんー！」

おやじにアッパーを打ち込み跳ね上がる…おやじは血を吹き出し倒された

「けほり…ああ…やつぱつなまつてゐなあ

多分あの時恋奈とやりあつてたら確實に死んでたぞ僕…

「はあ…陽哉達に怒られるの確定かな」

倒れている六人のおやじ達を見ながら少しばかし溜め息が出た

「あ…あの…」

「ん? 何?」

さつきの少女は不安な顔になりながら近づいてきた

「助けてくれてありがとうございます!」

ペコリとお辞儀をし… 黄金色に近い茶髪の髪が垂れる…

「別に…助けた訳じゃない」

「え…?」

顔を上げた彼女の瞳とぶつかった…綺麗なパープルで制服のブレザーは文月と似ているがネクタイではなくリボン…スカートも青いチエック柄だ…

「というよりスカートが短いんだよ。だからあんなおやじに狙われるんだぞ?」

「う…そ、それはわかってますけど…」

「…例に言う美人に見せたい…足を長く見せたいとかいうやつか」

「…はい」

全く…なんというか…ん?

「痛…うわ…傷広がってるよ」

血がベタベタだよ…デザインナイフで切られた場所

「え…? ちょっと見せてください」

「お、おい!」少女はぐいっと顔を自分の方へ引き寄せる…胸がデカいんですけど

「…なるほど…ちょっと待ってくださいね」

少女はガサガサと自分の鞄をあさり始めた。胸が揺れて……いかんいかん！

「あつた！……ちょっと痛いですよ？」

「え？ いだああああああ！」

何？ 何だよこの痛みわあああ！

「すみません！……刃物で切れたならばい菌が入らないようにしないと」

そう言つてまた少女は引き寄せてきた。

「ちょつ！／＼／＼

「うん……」それで大丈夫」
「……お礼は言わないならな」
「はい。これでおあいこですしね」
「…………／＼／＼」
くつ……調子が狂うな……

「あの……お礼ならいくらでもしますからね？」

「……いや。いらない」

「で、でも感謝してるんです！……私を助けてくれたのはあなたが初めてなんです！」
「だから……助けた訳じゃな……」

な、なんだ……胸が熱く……

「誰も私を助けてくれなかつたんです…」

「あ、敬語じやなくていいから」

「えーあ…じや、じやあ…」

「…」

彼女の名前は麻生理香ませいりか長ーストレートに姫路さんに匹敵するた

わわを持っている

気弱なところがあるて…優しそうな奴だった

理香は弥生学園の一年生にして保健委員長らしい…だから傷の治療

を知つてたんだ

彼女は僕と同じように…男に騙されたあげく犯されたんだ…

「あ…」」大丈夫だよ

「そう?…じゃあ氣をつけとね

「うん…吉井君も…また会おうね」

「…僕は御免だよ

「くす…そうかもね。おやすみなさい吉井君」

大丈夫だろう。一度とナンパされたりはしないはずだ

「ああ…おやす…ん…」

え…?何か柔らかい…感触が

「…またね吉井君」

「え…あ…?」

これが僕の初めてのファーストだった
：

十一 間田・ミスと再決戦とHンド

「……………朝か」

昨日の記憶は何処へ行つたのか覚える前しか覚えていない手にはいつも通りゲームが握れている

「…今日はAクラスとだつたな…」

気合いを入れ直さないと…なにせAクラスには志奈とあいつがいる

…！

「ふう……」

少し息を吐いてから服を脱ぎ捨てる…相変わらず胸辺りに傷跡がある…

「今日で決着をつかせてもらひつぞAクラス…」

頭がぼーとしていたせいか雄一が言つている作戦が頭に入つてこない

「おい明久！」

「…………どうした？」

「どうしたじやないだろ…説明聞いてんのか?」

「聞いていないと言うよりは聞こえないがふさわしい…

「大丈夫か明久?」

「明久さん昨日もぼーとしてましたよね……」

陽哉と光奈がじつと覗き込んできた……僕としたことがどうしたんだ一体

「たくつ……気合い入れないと簡単には行かないぞ」

「ああ……『じめん』」

本当にどうしたんだろう僕は……何故か頭に何も入らない

『……くす。必ず後悔するよ明久』

「!?

何ださつきの…………どこかで聞いたことがあるような……

「アツキー大丈夫?」

「……ああ」

この時の僕は何が起きてるか全くわからなかつた
時期に起きる……イベント。そして……

「よし……明久。Aクラスに宣戦布告をして来い」

「断る。お前が行けばいいじゃないか」

いつもいつもやられてたまるか……! 今回だけは無理だしね

「そうだ…鈴」

「何？明久君」

「お前行つてこい」

「…え！？い、嫌だよ」

「…………はあ。せつかく…お前のこと尊敬しようと思つたにな
「行つてきます！」

鈴は教室を飛び出し光のように消えて行つた

「案外酷いなお前」

「……別に…ただ信頼してるだけだ」

後ろから何かオーラを感じたが気にしないでおこう。
しばらくすると無傷の鈴が戻ってきた……さて僕は僕で準備しないと

『面白ことをやつてくれるじゃないかあの糞ガキ…まさか教師を
利用して試験召喚戦争をするとわね』
『…はい。今日の午後にはAクラスと試験召喚戦争を行う予定です
『ちようどいい機会さね。ちよいとAクラスの高木を呼んでくれな
いかね？』

『高木さんですか？ああ。例の指輪のことですね』

『そうさね…高橋先生のクラスの子で最も優秀な彼女なら…この
真紅の指輪使えるだろうしね』

『ええ…しかし吉井明久についてはどういたしますか？』

『あいつについては処分は確定してるよ…』

『では戦争後と言つゝとよみしこですか?』

「ああ。頼んだよ」

Fクラス吉井明久

以下の生徒を転校処分とする

学園長 藤堂カヲル

廊下からかん高い声が響いた。ポーテールを揺らしながらひたすら笑う彼女は自分の教室であるAクラスへと向かつていた

『もつと…痛めつけてあげるわ明久。私の…憎しみはこの程度じゃ
ないから』

まるで蛇のように… 蟲くその影は… 吉井明久に知らず知らずの内巻

きつき……そして毒牙を向けようとしていたのだつた
そして……Aクラス戦が吉井明久にとつて最後の試験召喚戦争になる
とは誰も知らなかつた

「……僕は……一体どうしたんだろ?」

そんなことも知らず明久は……昨日の出来事をゆづくつと思い出して
いるのだった

「これはハッピーエンドではない……バットエンドなのだ

十一 間田・馬鹿と天才と頂上決戦

さて時刻は1時。昼飯を食べた僕らは補充試験を終え準備をしている…あと30分で戦争が開始される

「じゃあ作戦の通り動いてくれ

「おう!」

指揮官にして代表の雄一はみんなに指示を出す…今回是一騎打ち式ではなく戦争型らしい

「いよいよAクラスなんですね…」

「ああ…仮を返す時が来たな」

姫路さんの言葉に雄一は頷きながら外を眺める

そう…僕らは一度Aクラスに敗れた…理由はどうあれ負けたことに変わりない

「けど…そう簡単には行かないかもな

「どういうことアキ?」

「…Aクラスに霧島さん以上の学力レベルを持つた奴がいるんだよ腕を組みながらじつと見える…高木恋奈…あいつは昔から勉強得意としていて今では学園で一番と言つていいほどだ

「でも…アッキーにかかればいちじるじやない?」

「いや…明久でもわからないぞ」

「どういうこと陽哉君?」

やつこつ話しているうちに時間は迫つてきて…さて馬鹿と天才

…今度はどちらが勝つのやら

恋奈 side

「いよいよね」

優子が時計を見て静かに立ち上がった。
Fクラス…か。優子の話しだと一度勝つたらしいのよね

「…緊張してるの恋奈」

「別に…ただ早くあいつを叩きのめしたいだけ」

「そう…でも…それは私がやることよ」

那杜撰としばらぐ睨み合っていると代表の声が聞こえてきた

「…みんな。相手はFクラス…でも油断はしないで」

「「はい！」」

「Fクラスなんか叩きのめしてやるんだから…」

「馬鹿なんかに負けないわ！」

あちこちからやる氣と罵倒…流石代表…みんなのモチベーションを
上げてくれる

「私が狙うの代表の坂本雄一ただ一人よ」

「…みんな頑張りましょう」

時刻は1時30分を迎えた。戦争が始まろうとしていた。明久…必ず戦死させてあげるわ

「Aクラス！突撃！」

「おお……」

ドアが開け放たれみんなが一斉に出て行く…さて、私も行くかな私が狙うのは代表じゃく吉井明久ただ一人

『Fクラス覚悟！』『馬鹿の癖に…後悔をせしやる…』

『坂本！首はもつたああ…』

廊下からそんなことが聞こえる…どうまで持ちこたえれるか楽しみだわ…

けど悲鳴は聞こえなかつた…Fクラスの人達なら確実に突撃してくれると思うんだけど…

『うわああ…』

『きやあ…』

『ぐは…』

「…?…これはAクラスの人達?…どういふことなの?」

隣にいた那杜撰が少し前を歩く

「ふうん。面白い」とやつてゐるね明久

「…明久君?」

私は那杜撰の言葉で目を凝らして見てみると…すると廊下では

「はつー。」

驚異的な点数を叩き出している明久君がAクラスを倒していく…

「そう… 明久君本気なんだ」

「… 恋奈。みんなに指示を」

「わかつてゐるわよ…」

なるほどね… そういう作戦か… やるじやない坂本雄一…
私は少し前に歩く… そして明久君の前へと歩み出る

「恋奈…」

「残念だつたわね明久君。あなた達の作戦は失敗よ」
すると明久君はニヤリと笑つた後に私達の方に向かつて叫んだ

「させるかー！ ムツツリーーー！」

「へ？ ムツツリーーー誰それ？」

明久君の言葉に反応し教室から一人の男の子が飛び出して來た

「……保健体育で勝負ー！」

「あつーー！」

しまつた… 狹いは最初から私ー？

『吉井明久なんか倒してしまえー』

『Fクラスくたばれええ』

後ろから来たみんなは何も知らないから当然明久君の方へ走つて行く

「駄「試験召喚！」」

「残念だつたな恋奈…君ならすぐに反応することくらいお見通しさ！」

明久君はそのまま突撃してくるAクラスを迎え撃つ…

「試験召喚！」

吉井明久 Fクラス
保健体育 642

&

土屋康太 Fクラス
保健体育 752

Aクラス 10人
保健体育 280 × 10

&

高木恋奈 Aクラス
保健体育 520

「…700！？」

「残念だつたな。ムツツリーは保健体育においては学園一位な
さ。それにモブなんて僕の相手じゃない」

「……………いぐぞ明久」

「ああ！」

明久君はチャキリと銃を構え、土屋君は手裏剣とクナイを構えている

『なんだよあれ！？』

『勝てる訳…』

「く……せめて厄介な土屋君だけでも」

「甘いんだよ。ムツツリーは簡単には倒せない。いくらお前でも
な！」

その言葉を合図に明久君は銃を乱れ打ち…土屋君は金の腕輪を掲げた

「加速」

キーワードを合図に土屋君の召喚獣が光る…え！？見えない？
「加速終了…」

「え？え？」

高木恋奈 Aクラス
保健体育 0

気がつけば私の点数は0になっていた……

『うわああ！』
『きゃああ！』

Aクラス 10人

全滅……した?

「恋奈……学力だけじゃ全てじゃない。馬鹿だつて……やる時はやるんだ」

そう言った後明久君は冷たい視線で見つめ……そしてAクラスへ向かって行く

『戦死者は補習！』

私は西村先生に捕まつて……補習室へと連れて行かれた
流石だね明久君……でも……私なんかよりもっと凄い人がその先に居るよ？

Aクラスとの再戦はFクラスの優勢から始まつたのだった

馬鹿と天才と頂上決戦

「上手く言つてるみたいだな……」

俺は腕を組んで校舎を見上げる……ふん。明久の奴本気つてことか

「坂本君：私達も準備した方が」

赤咲はそわそわしながら校舎入り口を見ていた

まあ確かにいつまでも上手く行かないしな…………よし

「わかつてゐる。お前ら！指示した通り次の行動に移つてくれ！」

「「おうー。」」

さて翔子達は気づいてるだろ？から急がないとな。代表は必ず何処にいるのか場所を示さないといけない

だから俺はギリギリまで教室に待機していく、Aクラスと明久が勝負を始めた時に動く準備をしていた

だが……あっちには優等生がわんさかいやがる……そこでムツツリー一をサポートに回し明久が言つていた高木を討ち取らせる奴は勘がするどいらしく俺達が何をするかわかつてたらしい……ムツツリー一はサポートでもあるが口封じもある

その間、外に出させたクラスメイト達に次の準備をしてもらい……準備ができた所で秀吉からの無線を通じ俺は外へと滑り降りたまあ……廊下にいる奴らはなかなか気づけないから……恐らく翔子や久保辺りが来るだろ？な

「明久……これはお前がどれくらい戦死させるかに鍵がかかってる

……

「……このことは言いたくないが……頼むぞ明久！！」

s i d e 明久

廊下にいる奴らを蹴散らしAクラスへと走る…。雄一達は外だ…当然代表は場所を教えないとならないから霧島さん達は動く…なら今やるべきことは出る前に奇襲することだ…！

『吉井覚悟！…』

廊下からは指示を受けずに来た奴らがなだれ込んで来る…愚かな…教室に残つてればいいもの！

「試験召喚」

赤い制服を身につけ一丁銃を持った召喚獣が姿を現す…相変わらず
凛々しい姿だ

『な！？』

『600！？』

後ろからはムツツリー二が大島を連れてAクラスと戦っている

「さあ来いよAクラス」

力チャリと構えてダッシュする…同時にトリガーを引いて球を打つ

バアアン！！

球は一人の生徒の召喚獣に直撃。そのまま連射して戦死させる

その時間およそ五秒

『うわあ！』

『きやあ！』

更に勢いを止めずに次々と撃つ

指示は的確にそして確實に狙う…これは集中力と操作力がかなり必
要とされる

が…

僕なら可能だ…いや僕しかできない！

This...これが観察処分者の利点だ！

『観察処分者のくせに!』

『学園の屑がふさげんなあ!』

「何とでも言え。でもそんな観察処分者に負けたお前らが屑だろ?...
冷ややかにそいつらを見下ろす...ふんいい様だ...馬鹿に天才が負け
ると言うのは実に面白いな

『ふーん...明久隨分と偉そうだね』

Aクラスの教室付近から声が聞こえそつちへ歩いて行く...そこには
ニコニコと笑っているあいつがいた

「久しぶりだな那杜撰...」

黒い髪を揺らしながらこっちへと歩いて来る...那杜撰
こいつは僕の元彼女にして地獄へ叩き落とした張本人だ
「くす...凄く男らしいね」

「...ああ。誰かさんのおかげでね」

「ふうん...」

お互に笑いあつたまま動かない...ああ本当にむかつくなつ

「いいの?代表行っちゃつたよ?」

「ふん...別に構わないさ。足止めが僕の役目だつたからね」

「そう」

「那杜撰...噂は聞いてるよ。上手くいってないらしいな」

その言葉に那杜撰の眉がピクリと動く...

「かわいそう」「…」

「気持ちがこもっていないよ」

「当たり前だ」「…」

「……許さないつ！」

那杜撰はいよいよ表情を変え僕を睨みつけてくる。

「あなたが悪いのよ！…あなたが観察処分者なんかになつたから私の評判はがた落ちだつた…馬鹿にされ…Aクラスに入つて評判を上げようとしたのにあなたが試験召喚戦争を始めた噂が広まつて…また変な目で見られて彼氏も変な目で見られ始めしまいには上手くいかなくなつた」

那杜撰はぐぐつと拳を握りしめ声をさらりと荒げた

「全部！全部！明久が悪いのよ！…どうして観察処分者なんかになつたの！…どうしてそれで平気なの！…どうして私が忠告したのに言つことを聞かなかつたのよ！…」

「言いたいことはそれだけか？」

「え？」

「…やつぱりお前…最低だよ。結局は外しか見ていない…お前は臆病者だつたのさ。愛する心なんてなかつたんだよ」

「……何言つてるのよ」

「お前なんてもう僕の敵じゃないよ。ありがとう　おかげさまで僕はわかつた」

那杜撰が呆然としている中、僕はニヤリと笑い言い放った

「女は信じる者じゃない…ましてや近づくのも危ないってね…でもあいつらはお前なんかよりずっとましだけどな」

「……！？」

「……！？」

「そうだ馬鹿な奴らはろくな奴しかいない。でも馬鹿だから…信用で
きる。Aクラスのように冷え切った奴らなんかにはわからないだろ
うけど

「決着つけようか那杜撰」

「…いいわよ。あなたを完膚無きまでに痛みつけてあげる…!」

十二回目・指輪と大蛇とAクラス戦決着（前書き）

Aクラス戦終了です。次からようやく本来の話しへ入れます！

十二回目・指輪と大蛇とアクラス戦決着

『『試験召喚…』』

ポンッと音を立てティフォルメされた僕らが現れる
那杜撰の召喚獣は黒い鎧に大剣を持っている。…ダークナイトか
面白い

「へえ…明久の召喚獣随分と豪華になつたんだね」
「誰かさんのおかげでね」

銃を取り出し素早く一発打つ…しかし那杜撰は剣で体を隠して玉を
弾いた
カキンカキンと打つた玉は上空へと上がった

さつきのは試しだ…まずは相手の状況を調べてみるか…

「遅いよ明久」

「ふん…じゃあこれでも…かな?」

銃を一発打ち那杜撰は素早く剣で防ぐ…素早く背後に回り弾丸を二
発打つた

ガキヤアン!

「突出に根元で防いだか」

「…ふう」

点数は減つておらず変わりに手をパタパタと振る那杜撰の召喚獣が
いた…おそらく痺れたからだろう

吉井明久 Fクラス

英語 628

V S

421

草原那杜撰 Aクラス英語

421

「よつと！」

那杜撰の召喚獣が振り回した大剣を避け懐へ打つ。那杜撰は素早く避けて逆に大剣で切り裂こうとしたてくる

「やばつ！」

かろうじて避けて転がる…あんなもので斬られたら痛いっての

「…は！」

「つておわあ！」

危なつ！なんだあのスピード…大剣つてあんなに早く振れるか？

「そらそら…！明久避けてばかりじゃ勝てないよ？」

「ちつ！」

くそ…那杜撰の奴操作技術が上手くなつてやがる…これは様子見どころじやないぞ

「そこ…」

「…ぐわ！」

那杜撰の召喚獣は剣を突き出し僕の召喚獣の肩をかすらせた

「く…かすつてこの痛さかよ」

「まだまだよ」

「！？」

那杜撰は剣を槍のように持ち素早く突いてくる。くつー早い！

「ぐー！」

「あはは！明久の召喚獣つて遠距離だからこいつの弱いもんね！」
剣が肩に突き刺さり激しい痛みが走った。

く…馬鹿な。ファーデバックつて半分の打撃を受けるはず…なんだ
この痛み…まるで本物に刺されたようだ

「はあー！」

「ぐー！調子に乗るな！」

銃で振り下ろされた剣を防ぎ腹にもう片方の銃を突き付ける

「しまつーー！」

「遅いぜー！」

スガガガガと連射して那杜撰の召喚獣にダメージを与える。そしてひ
るんだ隙に後ろへ下がり片方の腕を撃ち落とした

「く…」

「はつーーどんなもんだ」

吉井明久 Fクラス

英語 423

草原那杜撰 Fクラス英語

235

「…くつ。明久の癖に」

「隙ありだ！」

「さやあー！」

「油断したな那杜撰……これでお前の召喚獣の両腕はもう無いぞ？」
だが、那杜撰は落ち込むどころか笑いだした……

「あはははははは……わかつたよ明久！そんなに痛みつけて欲しいなら……」

「！？」

そう言つて那杜撰は天に腕を掲げた。腕輪……いや違う！あれは指輪か！？

ブラッディーダー

キーワードを口にした途端……黒色の指輪が光りだし……那杜撰の召喚獣を変貌させていく……

「明久！腕輪と指輪の格の違いを思い知りなさい！」

「……なんだよあれ！？」

那杜撰の召喚獣は巨大な蛇へと変わっていた……大蛇？

「これが私の指輪の力……ブラッディーダー……別名……
を食らう者」

血

「ぐああ！」

何だ！？何が起きたんだ……！？

吉井明久 Fクラス

英語 231

「ば、馬鹿な！？点数が一気に持つていかれ……がふあ！」
腕に走る激痛に思わず跪いた。那杜撰はニヤリと笑っている

「……え？」

さつきまで触れていた箇所に血が付いていた。まさか本当に……！？

「……がは！」

召喚獣が両腕を喰われたことにより僕の両腕からも体液が飛び出した

「が……」

ファーブラック……が100%返つてきている！

「あら？ 降参かしら？ 隨分と弱いわね」

「はあ……はあ」

くそ！ 腕が千切れそうだ……早く終わらせないと

「残念……蛇に噛まれて終わりよ明久」

召喚獣の蛇が大きく口を開けて迫つてくる……さてよ。まさか点数が0になつたら……

「うわあああ！」

素早く太刀を抜き大蛇に向かつて突撃する

「食われるかあああ！」

ズバンッ

僕の召喚獣が蛇を一刀両断し……召喚獣は地に沈んだ……

同時に……

「きやあああ！」

那杜撰の体から大量の血が流れ……那杜撰は跪いた……

「……やつぱりか……だが0になつても死にはしないんだな」

これが指輪の仕組みか……ふざけたシステムだ

「くふふ。明久……あなたはこれでもうさようならね」

那杜撰は血みどろの顔のまま「ヤリと笑った
「…終わり? どういうことだ…」

『 吉井いいいい!! 貴様何をやつている…』

「 鉄人!? まさかお前! 」

那杜撰はニヤリと笑つたまま鉄人の所へ歩いて行く

「 西村先生…補習前に保健室に行つていいですか? 」

「 ああ…構わないが大丈夫か草原!? 」 吉井、見損なつたぞ。まさか女子に大怪我を負わせるとわな

「 な…!? 違う! 僕は乱暴なんてしない!! この指輪のせいだ! 」

そう言つて那杜撰の腕を掴み指輪を抜こうとすると那杜撰が顔をしかめた

「 馬鹿者が!! 怪我人に何をするか!! 」

鉄人は腕を叩いた後に思い切り顔面を殴りつけてきた

「 がつ!! 」

Aクラスの教室の中に吹き飛ばされてシステムデスクに激突した…
背中と顔にはとんでもない痛みが走つた…

「 ぐ…鉄人が…ふざけやがつて… 」

システムデスクからのそりと起き上がり鉄人を睨む

「 ……貴様… いいだろう… 最後だ。特別にお前を鍛えてやる

「 最後だと? 」

疑問に思つてゐる暇も無く鉄人はこつちに向かつて走り出した

雄二-side

「ちつ…登場が早いな」

「……雄二の考えていることなんてお見通し」

やつぱり翔子だけは来たか…くそつ計算ミスだ

明久とムツツリーに戦力を減らさせている間、俺達はあちこちの出入り口に机や椅子を大量に起きふさいだ

これはAクラス達を消耗させる為だ。日頃からずっとパソコンを打つているAクラスは運動をほとんどしない

だから俺達は外をフィールドに選んだ

そしてAクラス達は案の定俺を狙いに来るが…出入り口はあちこち

封鎖されている…

普通に履き替えて奴らは出ようとする…が出入り口は封鎖。なら違う道から…だがこれまた封鎖

そしてあちこち回つてみるが全て封鎖されている…なら奴らがやることはどうかすことだ

だが、これは体力を相当使つ… Aクラスなら余計にクタクタだ
ようやく出れたと思つたら陽哉達がお出迎え…そして体力がへばつ
ている奴らは複数の奴らで攻撃させる。そうすりやあ流石のAクラ
スでも負けるつて訳だ

だが奴らは違う

「どうやって来たんだ翔子」

「…愛子、優子、久保に手伝つてもらつた

「やはりか」

そうあいつらは簡単には倒せない…だが…工藤には月夜、木下には
秀吉、久保には姫路と戦わせている。そして翔子には…赤咲だ
なのに何故だ

「そして…汀^{なぎ}にも手伝つてもらつたから…」

「！？汀だと？」

聞いたことの無い奴だ…一体…誰

「あたしのことだよ坂本君！」

「！？」

振り返った瞬間…試験召喚獣を呼ばれ…翔子も加わり俺は敗北を余
儀なくされた

そしてFクラスが負けで戦争は終わるのだった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8501x/>

バカとテストと召喚獣～coldlove『馬鹿な君が好き』～

2011年11月29日17時51分発行